川柳の雑誌

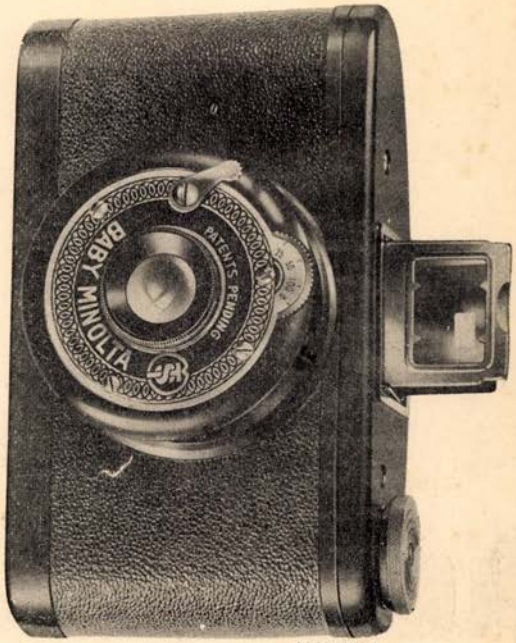
麻生路郎★編輯

NO.X VOL.XIII

手輕るに
寫し易すい

ミノルタ

ヴエストカメラ



f8 レンズ・アタチメントレンズ付
マープルシヤター

¥ 19.50

(全國寫眞機店
百貨店にて販賣)

淺沼商會

東京市日本橋區室町
大阪市南區順慶町

川柳雜誌

第十三卷　第拾號

遠く來て
信濃に山の
ない日なり

雨の松本にて

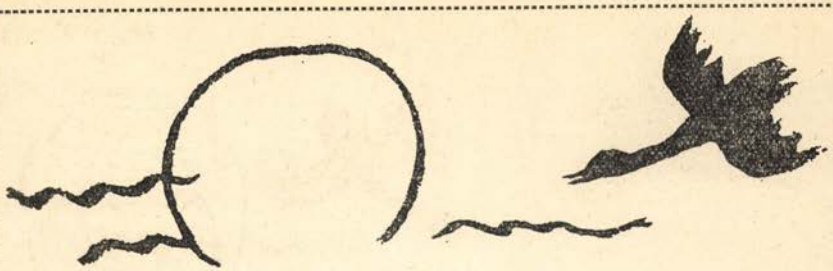
路郎

川柳雜誌 十月號目次

表紙・路郎筆

文苑

川柳名句評釋……麻生路郎…(四)
保土ケ谷より……福田山雨樓…(三四)
夜叉郎の思ひ出……川村東花菱…(六)
森魚…(一一)
武玉川二篇研究(二九)……梅本秋の屋
姪子東省二魚…(三〇)
秋と酒と杉……西田艸樂…(三八)
川柳指導講座……塚越正光…(四一)
私の知つてゐる大阪の奇人……高尾亮雄…(三九)
不朽洞漫筆……麻生路郎…(三五)
名木……須崎豆秋…(二五)



呼稱……西いわを…(二五)
東・京・雜・記……路郎生…(三七)
川柳横町……不死鳥…(五八)
川・協と其の事業……麻生路郎…(三六)

創作

近作柳樽……麻生路郎選…(一四)
日本名所名物川柳(四國の巻)……前田五健選並畫…(二六)

一路集

覺悟……福田山雨樓選…(四六)
噂……吉田水車選…(四七)
柳翁忌懇話會……(二八)
各地柳壇……(四八)
川・協・の・頁……(四五)　柳誌要目……(五二)
柳界展望……(五二)　川柳書架……(一三)
川・雜・案・內……(六二)　川柳家戸籍調……緣雨…(五四)
川柳雜誌社關係の人々……(六〇)　編輯縱橫……路郎…(五八)

川柳名句評釋（3）

麻生路郎

自轉車で急ぐ坊主の稼ぎやう　春秋

自轉車でお經の配達。日に薄れゆく「如是我聞」の傾打お布施の重さがさうさせてゆく今の世の出家は忙がしい。

怒とはさびしきものをもつものよ　丹路

ムキになつて怒る。怒らなくても濟むことに怒る。怒らなくても濟むことをムキになつて怒つたあとの寂びしさは堪え難い。

思出へ一目拔かして編んでゐた　峰月

ああ。あのころは……うちの人も若かつたし、ほんとに遠慮がちに私の名を呼んでゐたつけ……と在りし日の思ひ出に耽り、一ト目拔かして編んでることにフト氣づく人妻の姿が髣髴とする。

氷ひく音じやき〳〵と涼しさう　水魚

手鈎の尖きに、一寸引ッかけて來た一塊の氷。鋸で眞二つにじやき〳〵と切る。餘所目には涼しさうだが、額からはボタ〳〵汗が落ちてゐるのである。

大阪の灯はあのあたり天の川　機見女

それは憧れの大阪か。思ひ出の大阪か。よろこびか、涙か。そのどつちでゞもあらう。作者の心境がクッキリと描出されてゐる。

男裝は足を踏まれた聲を出し

豆秋

君だの、僕だのとおつしやる男裝の麗人。人混みの中で足を踏まれた拍子に、突如として女性本來の聲を出した「アラ、しどいわ、この人ツ。足の指が千裂れチヤ、ウ、ワ、ヨ」

肩車されて蜘蛛の巣顔へ來る

心府

肩車されてるこどもより、肩車してるお父さんの方がよつぽどうれしいのである。

「もう降ろしてよ。お父さん、顔へなんだが引ツかゝつたよ」

老の身のこうも並んだ人力車

八歩

自動車やバスの運ちやんに、今更轉向も出來ない老ひの身の人力車が唯一の元手とはそゞろに儚ない存在ではある

六疊の廣さに團扇一つ落ち

綠雨

きつちりと片づければ六疊の座敷もひろ〳〵とした感じがするものである。そこへ團扇一つ落ちてゐるのも風情のあるものである。

嫁の屁は怒り自分の屁は笑ひ

きち坊

屁を藉りて姑のイゴキズムを諷刺した句。不用意な嫁の屁を、姑を姑と思はぬからだと云つて怒り、女のたしなみが、どうのこうのと云つた姑の顔がどうくずれたか眼に見えるやうである。屁を取材にしてゐながら、そんなに穢ない感じがしないのがこの句のよさである。

一も金二も金犬は無職だに

睡花

喰べては寢、喰べては寢、凡そ生活難とはどんなことかと云はぬばかりの猫の姿に、ほれ〳〵と羨望の眼を投げた友人が幾人あつたか知れない。これは又犬に羨望の聲を放つてゐるが、さうした人々が必ずしも怠け者だと云へない今の世の中ではある。

荷造りのあとは女房が片づける

少女櫻

鄕里へ送る何や彼や。さて荷造りの面倒さ。一日のびにのびてゐたが、遂々亭主の手を煩はすこととなる。だがしかし、荷造りがすんだその手にはタオルと湯札があつた。釘は釘、繩は繩、古新聞は古新聞とあと片づけは女房の役だつた。

夜叉郎の思ひ出

川村花菱

伊東夜叉郎のこと

若い時から殆んど社交と云ふものをしなかつた私は、今でも殆んど人と交際すると云ふ事はないが、それでも五十年の間には、いろ〳〵の友達もあつた。今でも心を打ちあける二三の友達はあるが、考へて見ると、川柳をやつて居た時代の友達程ありがたいうれしいものは全くほかになかつたと云へるのだ。

川柳の友達とは、そんなら長い間のつきあひかと云へば決してそんなに長くはないが、ずつと別れて居ても、會へばすぐ昔のやうに親しまれて、話しはいつまでもつきないのが例である。

川柳詩社をやつて居る時分の友達、森東魚、阪下やなぎ津雲壽橋、吉田苔虫、高村豐耳、松田青風、成川浪々子、大野空蟬、鈴木歌郎—その中で、今井卯木と伊東夜叉郎が死んで居るが、いづれもなつかしい友達だ。

今井卯木も實にうれしい先輩だつた。が、私にはその中でも伊東夜叉郎だけは、どんな事にも忘れる事が出來ないのだ。

「こんな時に、夜叉郎さんが居らしつたら、よいにつけわるいにつけ、家のかみさんがよくこんな事を云ふ。自分の亭主の友達は、即ち亭主の友達で、家内の友達ではないのであるが、夜叉郎だけは私にも家内にも友達であつたのだ。私の家内も夜叉郎だけは、いろ〳〵の相談もしたらしい。私の事で困る事など何かと夜叉郎に云つたらしい。勿論その點で私はめちやくちやに夜叉郎には打ちあけて相談した。その相談は、大抵自分勝手な我儘な相談であつた。

人間には、それ〴〵のかくしごとが多いもので、どんな友達も、その事丈は知らずに居る事もあるが、私の事で夜叉郎の知らない事は一つもないと云つていゝ。

その夜叉郎は死んぢまつたんだから、私には永遠の秘密と云ふものが、自分で云はないかぎり死ぬまで包まれて居

るわけだ。

夜叉郎と私との交友は十年足らずの間ではあつたが、ある時は、毎日毎晩二人ではなし合つた時代がある。それは大正十年から十一年、私が、淺草の芝居に關係して、その芝居のそばに三疊の座敷をかりて通つて居た時代には、必らず午後になると夜叉郎が來て、それから十二時頃家へかへると、一所に來て、一所に家の風呂へ這入つて、さて又そこではなし合つて三時四時、ある時は夜を徹した事も度々ある。

世の中のはなし、川柳のはなし、これと云つて纏つたものはないが、二人はいくらはなしてもはなしつきないものがあつた。

その頃は、成川浪々子も一所だつた。三人づれで家へかへると、家には、三人分のどてらがあつて、みんな揃つてそれに着かへて好きなものなんかたべたもんだ。

夜叉郎や浪々子に用のあるものは、みんな私の家へ尋ねて來た程だから、相當なもんだと今でも可笑しくなる。

二月十日の夜、三人揃つて能書きを云つて居る最中に、夜叉郎の家からむかひが來て、その時、長男の富士郎君が生れたのだ。

句帳の全部が私の所に保管してあるので、しらべて見ると、

紀元節朝七時
男子出生

初聲の天も響けと男の子

と書いてある。結婚後十年目かではじめて出來た男の子に對して、夜叉郎はどんなによろこんだか分らない。

これは夜叉郎の事ではないが、同じやうに夜叉郎浪々子と三人で夜更しをして居る所へ、二時頃、表から津雲壽橋が自動車でやつて來て、私と夜叉郎とを表によび出し、ともかく袴をはいて出ろと三人して表へ出た。用は浪々子を迎ひに來たのだが壽橋は何にも云はないのだ。

何だい？何の用だい？もしや子供が病氣ぢやないのかい？

と浪々子は不安そうにきく。

ちがふ〳〵。

わるい事か、いゝ事か？……驚く事かい。

うん！　少し驚け！

と壽橋らしい事を云つて、四人自動車へのると、みんな少し驚け、成川の親爺が今死んだ。

と云ひ放つた。浪々子の舅さんが、急に腦溢血で亡くなられたのだ。それで吾々は袴をはかされたのだつた事がある。

もう一つは、同じく三四人で家に居る夜中、夜叉郎の家

からでんわで(その頃は、私の所も呼び出しでんわでした)家が火事だと云ふ知らせだつた。

それとばかり、仕度をしてかけつけると、幸に家はやけなかつた。

こんな風に、三人の居所は、勿論川柳の友人間にはちやんと分つて居たと云ふのが、世の中がよすぎたのか、お互がよかつたのが、私にはなつかしい思ひ出の一つだ。

社交をしないと云ふ私にこんな生活があるのを不思議に思はれるか知れないが、怎云ふものか、家を持つてから二十五六年、今日までお客のない日と云ふのは殆んど一日もなく、今でも多い時には朝から晩までに、十四五人の事がある。先づ平均して六七人はあるだらう。それで居て私は友達の家へ尋ねて行くのは、一年に一度か二度だ

友達と云つても、五日に會ふか十日に會ふかならば、一年間に、三四十回になるが、夜叉郎と私とは、僅かの間だが、連日連夜に亘つたのだから、優に二三十年の交沙と同じ事になる。

私が劇界にすねて、何にもしないで居た頃も、よく夜叉郎は、芝居を書け、脚本を書けと私の實力を信じて忠告してくれた。

ユーモラスな浮世ばなしをすると、それをそのまんま書け、立派な小説だと感嘆してくれた事も度々ある。

お金が取れるまゝに、淺草の芝居にいゝかげんな仕事をして居る間にも、いろ〳〵と忠告してくれた事がある。

二人はよく二人丈で歩いた事がある。足がわるかつたが極めて達者に歩いた。二人で野球見物によく行つた事がある。

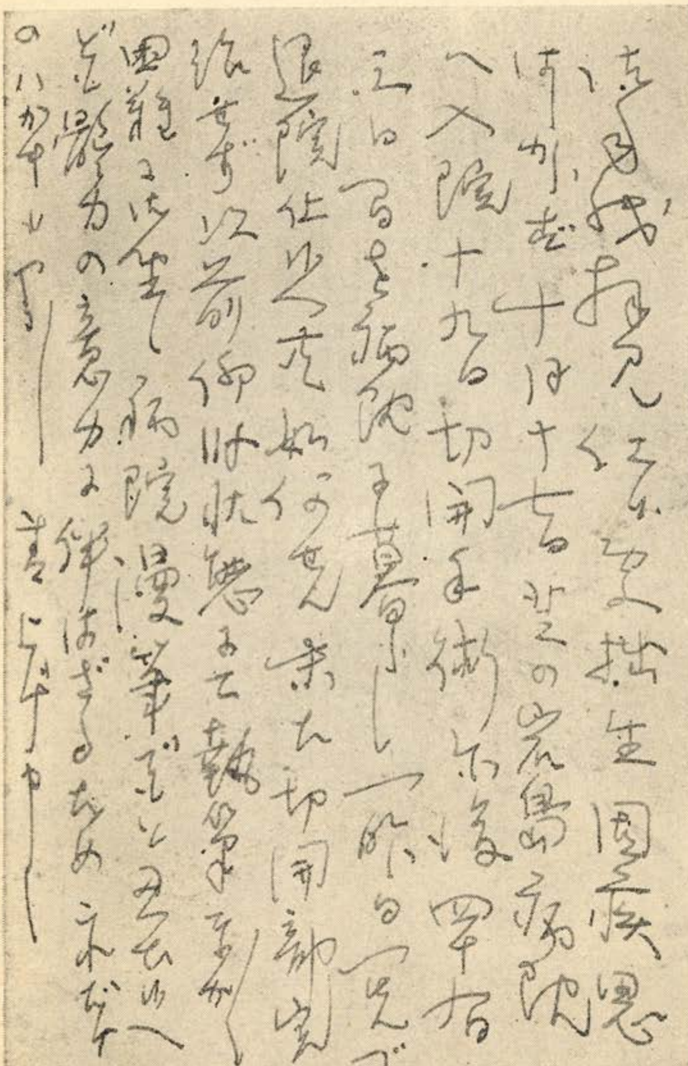
その頃は、神宮野球場はないので、早稲田とか駒澤とか隨分遠くまで行つたもんだ。

早く死んだもんだから、神宮の球場も知らない、野球放送も聞かなかつた。それが何だか可哀想だ。生きてゝくれたら、私は夜叉郎の爲に、必らず指定席も買つたらうし、やはらかいふとんも買つたらうと思ふ。

よし寢ながらでも、放送を聞かしたらば、どんなによろこんだらうと思ふ。

放送と云へば、川上三太郎も野球が好きで、いつかなど品川に居る頃、早慶戰を聞く爲に、わざ〳〵私の家へラヂオのセツトとレシーバーを持つてやつて來た事がある。二人共耳にあてゝ居るので、はなしは出來ないが、勝負がクライマツクスに達すると、お互に顏を見合はせる、早稲田がいゝと同じ心で眼を見合ふ、早稲田がしくじると、淋しい顏を見合はせる。試合がすむとウーンと云つてお互にうなり合つたが、これも世の中がよかつたのか、お互がよかつたのか分らない。

下掲の寫眞版は故伊東夜叉郎氏の筆蹟で大正十五年の「川柳雜誌」新年號への原稿依頼に答へられし葉書で十二月二十一日の消印になつてゐる。同氏病發と入院中の消息を窺ふことが出來るのでこゝに發表した。(路郎宛)同氏は川村花菱氏等と共に「川柳詩」の同人として知られてゐたが大正十五年九月九日午前六時に永眠した。



夜叉郎と私とが、そんなにしば〱起居を共にしたのも一年半程で、大正十二年にはもう夜叉郎は外へ出られないまでにカリエスが進んで居た。大正十二年の秋その動けない夜叉郎を無理に車にのせて近所ではあるが來てもらつた事がある。私の一身上の相談で――それもくだらない女の事で――南無阿彌陀佛恁書き來つて、私は更に涙新たなるものがある。大正十五年九月

病人が見て置く醫者の鼻のあな

の句を殘して夜叉郎は死んだ。今年十年を迎へて、命長くして、耻多き自分をかへりみて、まことにすまないと思ふのだ。

大正十三年五月三十日と云ふ頁には、力强い字で數多くの句がかきつけてある。私はその中から二三夜叉郎らしい句をひろつて見たいと思ふ。

及第へうてば響くと服屋が來
メンタルテスト一現とは何ですか
口笛のユーモレスクで給仕來る
女房へあくびうつして寢るときめ
電車で肩をたゝかなかつてよかつたはなし
豆腐屋は露路へ身輕になつて來る
虫賣は風袋だけの荷をかつぎ

○

將棋盤相手が上げて歩をひろい
塩せんべとたんに一語聞きもらし
相談の相談約手持つて來る
呑みぶりは藝者の歳の廿四五
密柑箱繩のまんまで食ひへらし
人別は甥があづかるかひごろし
笑はない客へぢろりと小さんの眼

○

いゝ着物もしかも姉が死んだ時
叱られて出て遠い故郷
のほほんのほんで息子は家を出る
お月がけ洋服で來てまごつかせ

○

蚤を取る女房手練の指をなめ

帳面が段々しまいになると、寢ながら書いた字である事がよく分る。再起を斷念もし、やがて死をも覺悟して居た夜叉郎も、お母さんが亡くなつた前後には、再び立ち上らうとした力强さが句帖の字にも句にも分る。

母臨終句

母の手に消えなんとする脈を追ひ
母に別れて
叱られる張合のないつまらなさ

とあるあとに力强い字で

安全の替刄はよしか旅仕度
海から暮れて潮くさい風

と書いてある。夜叉郎の旅はかへらない旅だつたのだ。

夜叉郎の作品には、歌もどつさりある。小說もある。紀行もある。脚本もある。

私は時々それを見て、落ついて整理してのこして置きたいと思ふのだが、今にその落つきを得られない。

せめて川柳だけでも、その中に揃へて置き度いと思つて居る。（九月廿二日）

○ 夜叉郎追憶

過日、主幹から夜叉郎の事を書いて呉れと云ふ書面を受取つた。私は、私の親しかつた友達で川柳の先輩を、路郎氏が忘れずに居て呉れるのが、嬉しかつた。早速、書かうと思つたが、彼に關する思ひ出は、それからそれへと盡きる所がない。ふと、私は、嘗て彼が、かう云つた事を思ひ出した。

――惜しい事は、啄木が川柳を知らなかつた事だ――

私は、恥しい事だが、啄木の歌は、まるで讀んで居なかつた。僅に、「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」位を人づてに聞き嚙つてゐた位に過ぎない。其後、思ひ立つて、啄木の歌集を讀んでみた。さうして、夜叉郎の言葉をつく〳〵良い事を云つたものだと感心した、流石に彼らしい鋭い觀察に敬服したのであつた。

今度、此の事を思ひ出して、再び、啄木歌集を讀み返してみた。

○大海にむかひて一人七八日泣きなむとすと家を出でにき

之に對して私は、直に武玉川の二句を思ふ。

森東魚

見つめても戀しいたしにならぬ空
腹の立つとき見る爲の海

○まれにあるこの平なる心には時計の鳴るもおもしろく聽く

時には、啄木もこんな和やかな境地にも在り得たが、川柳を知つてゐたら、更に、朗かな、幸福さを味ひ得たのではなからうか。夜叉郎の句に

ふつとした間違ひ時計鼻へ當て

と云ふのがある。決してこれは、クスグリの句ではない。何かなしに私は、湧き出て來る笑ひを禁じ得ない。

○龍のごとくむなしき空に躍り出でて消えゆく煙見れば飽かなく

誰の句か忘れたし、又辭句も違ふかも知れないが

見てゐれば煙ころがるやうに出る

と云ふやうな句があつたと思ふ。

○尋常のおどけならむやナイフ持ち死ぬまねをするその顏その顏

剃刀も逆手にもてばおそろしい

と、古川柳は詠んでゐる。

○はたらけど働けど猶わが生活樂にならざりぢつと手を見る

○とある日に酒をのみたくてならぬごとく今日われ
　切に金を欲りせり

古川柳に次の二句を思ふ。

　これ小判一と晩うちにゐてくれろ
　良い天氣つく〳〵金が慾しくなり

○女ありわがいひつけに背かじと心を碎く見ればかなしも

啄木は女の心根を憐れんでゐるが、逆に男を冷笑した古句に

　惚れた奴見苦しい程つかはれる

が、ある。私は茲に「冷笑」と書いたが、表面冷笑的に詠んでゐるが、古川柳は、見苦しい程つかはれる奴に、寧ろ親しみを持つてゐる。その立場になれば、俺だつて其の口だ――と云ふ氣分がある。さうした所が、「古川柳の良さ」であると私は思ふ。飛んだ話が脇道へそれたが、――

○晴れし空仰げばいつも口笛を吹きたくなりて吹きてあそびき

私の句に

　ふいと又口笛になる心待ち

がある。夜叉郎が、當時非常に推奬してくれた句で私には懐かしい句である。

○ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聽きにゆく

○かの旅の汽車の車掌がゆくりなくも我が中學の友なりしかな

夜叉郎は

　隅みツこで車掌と名告る國訛

と、電車内の光景を捉へてゐる。

○かの時に言ひそびれたる大切の言葉は今も胸にのこれど

　惚れたとは短かいことの云ひにくき

對照して興味がある。

○何となく今年はよい事あるごとし元日の朝晴れて風なし

路郎氏の

　元日だせめて眼鏡を拭きませう

の境地を思ふ。

○百姓の多くは酒をやめしといふもつと困らば何をやめるらむ

古川柳は、暢氣にかう呻いてゐる。

　聞いてくりやいきが通つてゐる計り

○まくら邊に子を坐らせてまじ〳〵とその顏を見れば逃げてゆきしかな

夜叉郎も晩年、長らく病床に横はつてゐた。病床からの葉書に次の句がある。

　散髪に兒は見違へて寄りつかず
　繃帶の卷替へを兒にいたわられ

尙、「俳句が出來ました、之は自信ある作であります、震へる方と違ひます」とあるから多分、大正の大地震の翌年だと思ふ。(以下五七頁へ)

川・柳・書・架（六〇）

壺 句集

後藤蝶五郎著

▲本書は後藤蝶五郎氏の自選句集で、總句數四百二十四句は實に川柳を熱愛する氏の過去二十年を通じての收穫である。

卷頭には川上三太郎、小林不浪人、長谷川霜鳥、山田よし丸の四氏の序文がある。

▲昭和十一年十月一日發行、菊半截一一〇頁、定價五拾錢。發行所青森縣黑石町市の森五十番地、川柳みちのく吟社。

▲著者は柳誌「みちのく」の重鎭。

浮雲 句集

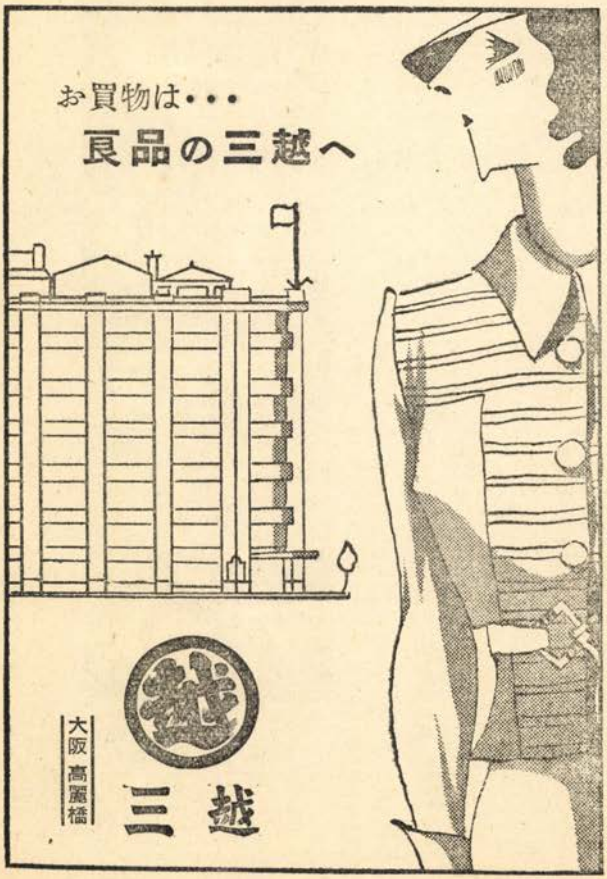
植木鬼佛著

▲本書は植木鬼佛氏の自選句集である川上三太郎氏序文の一節に曰く、

（前略）句風は一見平淡、何等の奇はないが、然し一句〳〵しみ〴〵味つて行くと、そこに中年の人の感懷、素朴なしつとりとした、惑はざるものを幾つ〳〵も見出すだらう。それは米の飯ではない。寧ろ麥飯の風味である」と。

▲昭和十一年九月二十三日發行、菊半截一三一頁、定價金四拾錢、發行所東京市王子區上十條町八五一番地川柳研究社。

▲著者が特異の存在であることは警官であるといふことである。柳誌「川柳研究」の人。



麻生路郎選

この次の事ある迄の袴なり　神戸　西村明珠

食慾の秋を八百屋の荷が重し　同

抗打つて會社の敷地そのまんま　同

男嫌らひ女嫌らひが好きになり　同

御破算の時だけみんな氣が揃ひ　同

卑怯者とはペン先が知つてゐる　同

水道の水がチョロ〳〵秋を告げ　回

大蜘蛛の逃げてくれるを待つてゐる　同

人間の淋しさ働く氣を起こし　同

生れ兒の欠伸倖な欠伸　松江　松崎讓二

横切つてぽつんとありぬ變電所　同

熱帶魚と僕と動かず淋しい日　同

「敵を愛せよ」だまつて歸るなり　同
邪心まだ去らず煙草を輪に吹けり　同
バイブルを母が持つてるなどやかさ　同
山莊と云ふのへ茶好きほつとかれ　同
半日は日光浴の靴磨き　兵庫縣　酒井美知夫
一合の酒は宵寢を强ひる酒　同
六文を持たせて遠い旅へ出し　同
奥さんと云はれる方もアツパツパ　同
サボテンに趣味あり妻と折合はず　同
長屋には惜しい名前で住んで居る　同
家傳藥明日にもなほるかの如く　同
未亡人表情も無く齒を磨き　今治　渡邊曉童
子も親も臍をぬらして西瓜食ひ　同
梯子酒いつものコースで醉ふて來る　同
名人の新聞代が滯り　同
夕立の軒につるした水枕　同
自動車へ乘つて時計のネジをまき　同

よつぽどの立腹社長ベルを押し　同
やりもせずラヂオ體操聽いてゐる　大阪　畑田よしえ
本箱へ去年の思想しまひこみ　同
戀人を殺した役者好きになり　同
憶面もなしに大慾言つてみる　同
一圓や二圓男の立話　同
思想が低下して月給が上りました　同
人一人轢かれて巡査立たされる　同
折れさうな男がいつち酒豪なり　尼崎　八竹正柳
皮梅科へ當然らしい顏で來る　同
主婦の友小脇に娘勤めに出　同
圓助ときめて暇入るネクタイ部　同
痩せ藥ないかともつたいない話　同
菊作り人の話は聞かぬなり　同
貸ボート時間をおまけして呉れる　東京　阿部佐保蘭
ボート屋の時計と合す腕時計　同
もう秋の見本を持つて京染屋　同

胎教へ額の中なるものを換へ　同
和尚さん新派のやうな妻が好き　同
放り出して大阪見せる昇降機　同
名月や呑むどこでなし痔の手術　大阪　市場沒食子
事務多忙電話は愛想なく切られ　同
學資補助やがて養子として迎え　同
秋風に持樂もいつか忘れ勝ち　同
去るほどに父逝き後の兄の我意　同
後家ながら以前に勝る煙上げ　同
ひよつくりと來れぼひよつくり居た出好き　今治　矢野虻の鷹
髭の無い助役出世をする氣なり　同
何時からか父もお酌をして呉れる　同
二人來て釣の心を忘れかけ　同
停電をする嵐なり愛にゐる　同
旅情ほのかにウエストミンスター　同
大西瓜父が出て來てポンと割り　名古屋　星野兄兄
朝寢して晝寢してよしウエトレス　同

犧牲者の遺族が並ぶ指定席　同
逝きし子の後の悲劇を知らぬ幸　同
洋樂へ母は眠つてゐるばかり　同
梅田まで見送つて來る馘の連れ　大阪　柳大門
人前でわが子林檎の芯も嚙み　同
連れたのが尾を卷くほどの犬に逢ひ　同
不甲斐ない父をほめてる綴方　同
日曜日妻の手藝に口を入れ　同
魚釣のぼんやり見てる朝の雨　大阪　小濱小貝
命日へ母だけ魚遠慮する　同
後指さゝれて金のある暮し　同
遲刻した罪を電車に持つて行き　同
隱藝遠慮したのに拍手受け　同
惚れてゐる弱身とろんと水を見て　金澤　安川久流美
秋風やサーベルさげて辻に立つ　同
恩給でもあればと妻は米をとぐ　同
受取つた金を支拂ふ人生よ　同

婦人記者この家の間取り褒めるなり　松江　小村　蘭蝶
出張は裏面視察もして戻り　同　同
金せびる不幸殊勝な口をきゝ　同　同
終電車笑へば笑ふ女ゐる　同　同
改めて來ますは承知さすつもり　愛媛縣　門田　雨城
流行歌風紀係を馬鹿にする　同　同
雨衝いて來た子泣きたい顏をする　同　同
エビフライ時價はうつかり食ふまいぞ　同　同
疑獄の火薄氷を踏むそばまで來　神戸　喜多　春秋
仕事して呉れる主任が邪魔になり　同　同
本山の屋根が反つてる空の下　同　同
子供だつた秋の或る日の柿の下　同　同
日給は五十錢だがAランチ　大阪　後藤　青兒
ポプラだけ繁茂する雨最う飽いた　同　同
下顎に汗を感じたアスハルト　同　同
晝寢から同じ欠伸の出る夫婦　同　同
お母様と呼べど姑といふ硬さ　大阪　坂本遼見路

惱むための宵寢ではなかりしに　同　同
ぽんと打つ胸も甲種だ響よし　同　同
吸入酸素へあばらの骨を動かして　同　同
落藉されてお灸をすへる日が續き　松江　梅本登美也
轉任は野菜の高い街と知る　同　同
朝風呂を妓二人が濁しに來　同　同
人知れず儲けてゐます家傳藥　同　同
帳尻が合ふてヤレ〳〵バツト喫ふ　神戸　難波陽出男
郵便受春の遊山のビラもあり　同　同
こんな好い日もあつたのか日記讀む　同　同
タツプダンス斯んなに足は動くもの　同　同
負けたのは應援團の知らぬこと　松江　池田榮之進
野線へきつちり役所仕事する　同　同
見送りの眼に橋もはやたそがれぬ　同　同
溜息のように螢の灯がひかり　同　同
せつかちな男へ猪口を押しつける　八幡　上野十七八
運惡く命拾つた松葉杖　同　同

忙しく扇子を使ふ儲け口　同
其時は其時と肩叩かれる　同
玄關を出れば役所の父になり　長野縣　林　幹
アドバルーンそんな所で淋しかろ　同
こんな川越せない姉の美しさ　同
風宿り又一人減る頼りなさ　同
遥足の列を見下すベニヤ板　名古屋　稻垣正穗
古パナマ姉の手藝へ貰はれる　同
女の子襷をかけて母の邪魔　同
一周忌元氣な聲が聞えさう　同
朝顏は隣へ伸びて花をつけ　大阪　辻古杖
行水の子は洗はれる聲になり　同
遲刻して少うし高いバスに搖れ　同
父親の弱りの目立つ大掃除　同
信心の心卑怯に似た心　神戸　大龜和克
寶塚とも思たり交換嬢　同
生甲斐を感じ孫への傘を持つ　同

テント村夏の陽ざしへ音もなし　同
腹立てゝ云うてしまへば濟む若さ　大阪　庄司淡路坊
タクシーが二臺通れる町に住み　同
叱られる覺悟を主人ほめて呉れ　同
ボスト迄ゆく乳母車テリヤ乘せ　同
肉眼で見へぬ埃に氣を許し　山口縣　三原狂路
聽診器續けて太い息をさせ　同
字の下手なのも親讓り貧乏も　同
御先祖にすまぬ落目の灯に坐して　同
叱られて出直すことにして歸り　松江　松崎專太郎
其椅子に馴れた脊廣の脊の艶　同
食堂の晝寢の型のまゝの椅子　同
十六の乳房は戀の二葉かや　兵庫縣　田邊由布
目醒しに明日の樂しみ預けて寢　同
人絹のうすき情よ街の人　同
信號が分るか馬も歩を速め　大阪　北川春巢
四十になつて齒は見直され　同

ハイライでいゝわと女慾がなし　同

妻といふ小杭の繩先俺がゐる　大阪　大鶴　喜由

癒る氣へ死の雰圍氣が動くなり　同

綿帽子嬉しい覺悟のぞかれる　同

子は泣きの一手で親にせまるなり　今治　長野　文庫

特長もなく養子にも望まれる　同

苦勞性夢に見るさへ不倖　同

考へることが嫌ひないゝ體軀　龍本縣　寺田　宗正

公園になる街外れ水が澄み　同

母さんの鋏は智惠でやつと切れ　同

借りて見る老眼鏡が合ひました　大阪府　米本貴志子

堺筋間抜けたものに人力車　同

ほんとうの事しか言へずせまく生き　同

たまさかのお伴せめても白く塗り　大阪　宮内　廣々

夕刊に話題求めて母と居る　同

時報の最後飛び上るやうに打ち　同

マツチ擦る男の鼻目秀麗に　名古屋　水田　燕人

嫁さんが青いキヤベツをもぎとつた　同

絢爛と終りの幕へ女くる　同

これ丈ぢや食へぬ給料に判を押し　大阪府　黒川　紫香

宴會のまだ出揃はず額を賞め　同

父待つ子畦で蝶々見つけたり　同

紛々たる右に左に心閉づ　大阪府　阿部　閑生

合宿の雨の手まくら足まくら　同

白露の頸にとびつく草を刈る　同

いきのよい魚を見せてねぎらせず　大阪　阪澄　風

居眠りの女重たくもたれて來　同

大學出もう二三年コンマ以下　同

ノーハット野望いまだに棄てられず　松江　勝谷山川兒

後は唯風鈴の音と鮎のほね　同

裏通り出店同業組合長　同

近頃の過勞春だと思ふなり　石川縣　前田義風子

男氣儘恥も仁義もない裸　同

失禮な姿で御禮狀を書き　同

英米が何ぞみぞれが解けてゐる　大阪　濱口　七歩
慢性の木根草皮知り盡し　同
月給を笑ふ女の手のチップ　同
無口な男爪先を見て歩き　神戸　山田　丸樂
山へ來て山へ來た事嬉しくて　同
抱いた子に吊革持たせ搖れてゐる　同
仰向けに泳げば遠き人の聲　今治　谷心府
月見草ほのかな戀を知る夕　同
蚊帳の中やれ極樂と思ふかな　同
星月夜明日の田植もあつからう　朝鮮　高原惡源太
お世辭を言ひ出すとたん蟬が鳴き　同
うれしさがお手柔かなど言はせ　同
人吐きにバスが來る來る夏の海　石川縣　勝山しさし
お土産は一つづゝ曰く附で出る　同
冷かして臭れず行商荷を仕舞ひ　同
桐一葉ルンペン空を仰ぎみる　尼崎　酒井　斗風
子を叱りたる淋しさよ街に出る　同

引眉毛子のある女と思はれず　同
ボーナスに會社の内輪話聞く　大阪　平野　不凡
退け時でなく痛快なビルの雨　同
興奮へ自動電話は水臭し　同
逃げてから强がりを云ふ一人ッ子　朝鮮　豐島　松女
晴間見て干す物干にかたつむり　同
すれ違ふ電車へ子供聲をかけ　同
犬の意地今日も八百屋に吠へて居る　愛媛縣　武田　京司
胎教をおそれ苦境の中に居る　同
もらい風呂こゝの娘もよく笑ひ　同
颱風に歴史ある松倒される　今治　秋山　惣吉
蚤も蚊もよそには負けぬ我家なり　同
看護婦も氷割る手が口にゆき　同
がま口を持たぬ散歩に子はあきる　朝鮮　末次三角山
明日に備へんとする寢につく　同
妻逝つた其日のまゝのカレンダー　朝鮮　江田當峨山
蚊を叩き次の話を促され　同

小策を弄して野心ある男　大阪　青木　松月
ふん〳〵で濟すどうでもよい議論　同
どの子とてやる氣になれぬものと知る　廣島縣　都　子
夢でよかつた寢返りをする　同
見習ひの女給子守として雇ひ　今治　菊池　憲一
テーブルの乞食となりてビール注ぎ　同
口眞似をしたりされたり兒と遊ぶ　金澤　荒木　立帆
凡俗の瞳いよ〳〵利に敏し　同
灯をけせば一層はげしい夏の虫　山口　西口悲戀坊
茶を入れて祖父の說論のながい事　同
三十をすぎて頭を下げなれる　大阪　正本　水客
トラツクの故障みぢめに雨が降り　同
うとまれて心淋しく下駄をはく　神戸　大月　昭象
落目ふと妻の襟垢目立つなり　同
午前二時我家の戸にも遠慮して　大阪　丸島　判生
嚴然と云ひ切つてから淋しがり　同
ペンの手へ糞横着な蚊がとまり　松山　芝田　靈子

膝枕四十男の血がたぎる　同
西瓜切る處へ久し振りの客　大阪　森川　佳風
欠伸からツト用件を思ひ出し　同
十五圓なら椅子ありといふ紹介所　島根縣　畑塚柳大佐
久しぶり少佐の伯父の馬臭し　同
すれちがふめくらの姿悲しめり　尼崎　酒井　政雄
酒のむが瑕と恩師に意見され　同
バスの屋根柳が伸びて音をたて　今治　富水　里子
制服の處女が給仕の名で呼ばれ　同
親方の泣いた芝居へみんな行き　大阪　山田　菊人
ショーウヰンドカツトグラスの影を見せ　同
瓢々と海のルンペンくらげ行く　今治　石手素寒貧
涼臺男で御座る姿なり　同
母と寢る廣さ淋しく旅にねる　大阪　さいち
末吉の神籤にたよる事ばかり　同
うすものへ十七貫の肉體美　大阪　シナ子
ボーナスへあれも豫算にあつたのか　同

ビール酒戀の虜となりにけり　愛媛縣　町田　承春
墜落をさすぞと蚊取線香立て　同
バス會社三つもあつてまだ待たし　兵庫縣　田島　破越
とてもいゝ身體曰くのあるモデル　同
行末を誓ふ二人に角砂糖　大阪　阪田　一麟
御利益を信じる母に米三粒　同
あなどつた男が先に店を持ち　奈良縣　嶋田　翠峰
どんぐりの背くらべといふ長屋に居　同
人混みを離れ濱の子泳ぐなり　和歌山　神田　晴二
ウインクもこめて濡れてる廓の灯　同
着陸へ大阪支店出迎へる　大阪　濱口　英三
認識がどうのと一人辭めさゝれ　同
片戀の淋しさ歌集ひろい讀む　大阪　小鹽　靜路
金に換へるため古本の塵拂ふ　同
暑かろと訪へば伜は甲子園　大阪　奥野　其奥
豆靴のまつさら棺へ入れてやり　同
病むことも神の試練と思へかし　尼崎　川村　觀月

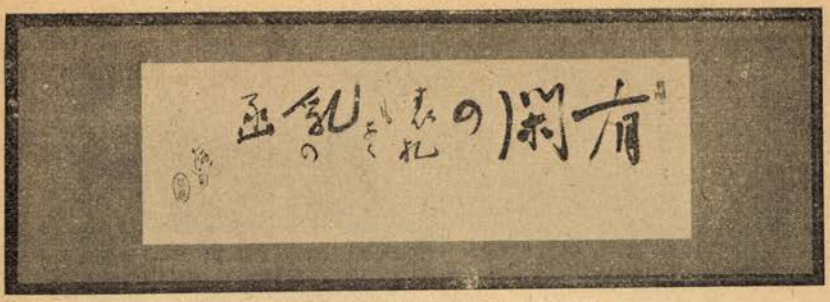
病院の窓方角がわからない　同
もう起きる氣になつた頃起しに來　今治　武田　紫陽
散髪屋出た眼に星が高いなり　同
人絹を女さげすむ眼を備へ　長野縣　高峰　柳兒
ウキンドの娘の眼いつしか肥えてゐる　同
逝く友に離るゝ友に秋淋し　高知　中澤　濁水
猪口ひやり秋をさゝやく冷凍酒　同
くどかれる事も承知のサクランボ　大阪　松枝　靜波
秋風へ少し慌てたトンボの眼　同
長生きをしたから先輩とも呼ばれ　金澤　森田　白舍
踏切を越えて奇麗な星になり　同
二次會は遲いぞと鳴る鳩時計　大阪　金井　串郎
賴母しい幹事にされて金がなし　同
聲色へ誓し女給の目を集め　丸　馬場　溟二
酒樽へ女將銚子の手がきまり　同
愛の巣の枕時計の捻子がきれ　尼崎　山田南濃路
犢職へ疑獄へのびる人の慾　同

賣れ切りの近い廣告まだ續き　堺　武田柳昌
漫畫記者こんなお鼻にしてしまひ　同
朝顏のつぼみ數へて如露の水　大阪　中村靜城
窮窟な行水してる二十貫　同
母達者袴型の浴衣着る　今治　月原宵明
ビーチパラソル戀は公開禁止なり　同
いちにちを長いと思ふ晝の汽車　松江　中須磨夫
會計は僕にまかせる父の酒　同
人生に一つ履歴が出來ただけ　大阪　荒木天秋
ゆく夏へ未練ありげなビヤホール　同
都會美を育むやうに撒水車　廣島縣　高畑案山子
飛行機へ廣告せがむ子供抱き　大阪　福井柳園子
厄除を多く並べて床の身の　鳥根縣　竹下章泉
修繕のまわつた胸だとさレントゲン　神戸　渡邊木履
口喧嘩勝つて淋しい夜の膳　大阪　井上一劍坊
エゴイスト消極的な事が好き　神戸　鈴木九葉
雜踏の中の自分は逢ひそこね　松江　奥井抱月

弟の來たのをだしにビール買ひ　今治　葭女
肥桶は町の朝へ配置され　神戸　山本幸人
運命が無能な男として生かし　大阪　辻いの助
ぜんまいのゆるむ女のやくざ唄　鳥根縣　高橋樗柿
當てられた年へ女只笑ふのみ　須磨　山崎海中金
あれが癖ですよと妻は笑つてる　朝鮮　廣津骨人坊
安い避暑生一盃にこの微風　信州　佐々木千隈
下戸の酒思ひだしては注いで呉れ　今治　石田美須賀
あさはかを女は女らしく詫び　名古屋　花岡堯子
短冊がゆれて風鈴音がさえ　大阪　宮川冠光
終電の一人二人が眠むたさう　神戸　三崎陽幸
待人は遲し神籤をたより寢る　大阪　山本葉光
ラヂオ聞く二階淋しい晝の雨　神戸　奈落
幼稚園の希望はみんな偉い人　今治　石手向上庵
近くでも男の知らぬ小間物屋　神戸　徒歩
辛抱をツバメと共にして暮し　鳥取縣　小判
味覺の王座トマトの色も夏のもの　鳥根縣　勝部海棠

時代 相案 山子の着てるアッパッパ　大阪　大坂　正一
臨檢へスロー モーション な妓にて　松江　日野　一
銀行になる鐵骨が錆びたまゝ　今治　松平　眉月
一錢に泣いて一錢貯金をし　大阪　見垣　社太
考への一つ一つか慾ばかり　松江　秋山　銀坊
吊鐘のやうな汗疹の子を背負ひ　大阪　内田　有耕
うか〳〵と短い夜を讀み明かし　島根縣　森山さわだ
デパートの休憩室で欠伸する　大阪　糸谷　春草
日曜の二人揃ふて洗面器　神戸　砂　丘
理想ありそして急がぬ二九の頃　今治　石手　河鹿
手相見に中年時代聞かされる　神戸　櫛野　靜水
カーテンに縺れ毛虫の無表情　松江　増原比呂志
煙草の輪おもひはまろく君のゆめ　神戸　夏　生
遊びたし貯金もしたしつかいたし　大阪　田中　勝
敷蒲團憂き日重ねてうすつぺら　長野縣　金井有爲郎
アッパッパネオンの街の晝を行く　島根縣　杉原　朴泉

空梅雨にはや帽子掛夏になり　大阪　山口　木守
熱高くうつら〳〵と日を泳ぐ　大阪府　藤井　一更
戀に生きる道は綠の地平線　東京　木村　明期
一人者又朝飯をぬいて來る　朝鮮　豊橋石燈籠
亡き父に似る子を恐く未亡人　松江　秋山　香方
春日野にいつしか鹿と友となり　大阪　今村マリオン
朝詣これも生きてる印なり　神戸　美岡　古城
沈むのは惜しい夕陽の秋の空　武　俠　骨
硝子器に初夏の食慾そゝるなり　廣島縣　芳　泉
淋しさは母と呼ばれぬ子を育て　大阪　今井　菊路
菊の香をかがんとすれば壁のある　山口縣　森元　宙芥
金のない弱さを知つた二十才頃　今治　小坂胡技花
もどつた蜂へ巣が落ちてゐた　今治　石崎　柳石
窓口で他人の錢をふと數へ　朝鮮　齋藤不夜城
浴衣がけなるだけ細い帶をしめ　廣島　大　政　官
ころも着たりでコーヒとトースパン　大阪　麻生アート



有閑の表札もなく乳の函　路郎

不朽洞漫筆

麻生　路郎

袂

私は頭が陳いのか、女の袂の姿態が好きだ。帶の兩横に袂の端をハセて用達をしてゐる姿に情味のゆたかさを感じさせられるし、洗濯の時、兩の袂を結んで襷にしてゐるのも、そゝられるものがあつてうれしい。

私の舊作に

人妻のあまりに長き袂
なる

といふのがあるが、だらりと長く垂れてゐるのもいゝ、風にあふられて靡つてゐる袂、電車などで膝の上にきちんと引きよせられた袂、若き女性が男をぶつ眞似をする袂等々、いろとりぐ〳〵に趣きがある。

杜默の亞流

杜默といふ人の撰つた詩が多くは律に合つてゐないので格に合はないのを杜撰といふやうになつたんださうだが、自由律がどうの斯うのといふ人たちで杜默の亞流でないのはすくない。

名木

須崎　豆秋

生田の森の「籠の梅」の立札に

(Kajiwara's plum Blossom)

と書いてあつた。これこそ日本武士のシンボルとして外人もワンダフルを惜しまないであらう。

ところが、そのま近かに「辨慶の竹」がある。「神功皇后釣竿の竹」がある。「敦盛の萩」がある。おや〳〵未だあるのかと、その名木の立札を見るとそれには「投球を禁ず」と書いてあつた。

呼稱

西　いわを

いつも考へてみる事であり、すぐに忘れる事でもあるが、デパートガールの呼び方を、同じくデパート食堂ガールを呼ぶに何んと言つたら適切かと云ふ事を？ アノ姉さん一寸！ アノネーはん一寸！ 君々、一寸々々、位ですましてゐるが何れも相應しくない。それでもデパートでは別に知らぬ振りして過してゐる。誰か、もつと適切な呼稱をつける人はゐないものか。

日本名所名物川柳

四國の巻

前田五健選並畫

（八）遍路

遍路宿石鎚山の見へるとこ　水客

目印に阿波はあの字の遍路宿　花之助

攝待と聞いて遍路は道を外れ　世間音

恩讐を忘れお四國子と巡り　狸公三

道を聞く遍路へ四國路は霞み　同

春はよし遍照金剛蝶も連れ　柳石

炎すえてさあお遍路の脚が出來　同

八十八跡が殘つて遍路濟み　竹阿彌

俗用に遍路二三日手間がとれ　曉童

春の山四國遍路をうつむかせ　せいち

くたびれた足八十八の土を浴び　紫香

法悅の四國遍路の道晴れて　青柿

華奢な手へ長閑にうけるお攝待　三　汀　亂蛙樓

納經を胸にたゝんで足をもみ　秋無草　曉童

火を借りてからお遍路の連になり　同　秋無草

母と娘の遍路へ櫻ちる眞晝　葉光　英賀夫

芋を蒸す匂ひへ遍路荷を擴げ　宵明　世間音

〆の餘生四國を巡る有難さ　方眠

雨宿り遍路は草鞋締め直し　みきを

有難く遍路は土佐へさしかゝり　いさむ

春霞遍路の鈴が見へ隱れ　木履

番外へ來るお遍路も春のもの　亂蛙樓

お遍路を宿めて大師の灯がともり　同

お遍路の鈴から花が咲き初め　九紫

自動車で着いた札所の賑やかさ　同

精鋭吟

權力に遠く離れて遍路居る　文庫

美しい遍路四國でよく貰ひ　方眠

子の足に任せてへんろ宿につき　亂蛙樓

チト早いセルで遍路は土佐へ發ち　曉童

お遍路にバスは埃を浴せかけ　秋無草

何々山何々寺あゝ南無大師〳〵　英賀夫

お札所の奇蹟を遍路疑はず　世間音

感吟

遍路又た感謝〳〵の日が續き　勝人

自句

お遍路に爲替が届く南無大師　五健

遍路宿二階へもくる筧水　同

日本名所名物川柳を募る

京都の卷　選者　山川紫明氏

（八）五色豆　締切　十一月五日

（九）芋ぼう　締切　十二月五日

投句は本社宛　用紙ハガキに限る

柳・翁・忌・懇・話・會

— 九月廿四日夜・於カナメ食堂階上 —

長襦袢

長襦袢演藝記者の名刺を見くだもの、味長襦袢涼しすぎ
長襦袢族舘の鎮の小さい事
ことづけが屆いたでせうか長襦袢
素人でない長襦袢出して見せ
長襦袢を出來ぬ約束して歸り
長襦袢大きな聲で姉妓をよび
笑へない話が續く長襦袢
長襦袢チントンシャンで强が見へ
長襦袢返事は長く〳〵書け
長襦袢見せて陽氣な妓が戻り

かほる選

春秋 同
鮎美 里十九
艸樂 勇
同路郎 鮎美
里十九 豆秋
勇路 人變
鮎美 夕鐘

內輪

金持の內輪を離れ露路に住み
內輪が寄れば話は愚痴になるばかり
いんま來た娘へガスの火を消させ
ウン〳〵と內輪のもつれ聞く電話
內輪だけになつて眞相明かすなり
內輪だけを言ふ氣安さの裸なり
うち〳〵の酒は一升瓶でつぎ
カーテンをおろして內輪での話
內輪から大臣が出た出雲富士
秘密主義內輪の事にして仕舞ひ
金金金內輪同志が淋しまれ
押し切つて迄內輪逆らはず
內輪からぼつ〳〵刑事さぐり出し
內輪もめ隣りの老人知つてゐる
內輪もめ主人朝から不在なり
內輪もめして二階から降りてくる
ろうそくは悲し內輪に見守られ
內輪またげんくそのわるい話也
落選は內輪の入れた票ばかり

艸樂選

勇 みつる
機見 女太
紀 人變
豆秋 同
秋 兒
青同 裡
夢同 里十九
裡 同
里十九 同
同 美
鮎美 同
同路郎 同

月掛けのことも聞いてる內輪同志
內輪から火を出し國をすてさせる
內輪もめ巡査そしらぬ顏ですぎ
女にも口を出させて內輪なり
內輪同志その小鬸も叔父がする
（軸）寢轉んで談すがよからう內輪同志

社長

たけ狩に社長は山の上にゐる
不機嫌な社長を給仕ふれあるき
今となつて社長の水臭し
有閑の仕事の女社長など
ひやかしもならぬ社長の美人客
國道を社長歩るいて歸るなり
來るともう社長は爪をつみはじめ
鳥籠へ社長の鼻が大きすぎ
演壇の社長の聲はちいさすぎ
何も彼も知つてた社長の前に立ち
先導の社長は少しかゞみ腰
フェルトの社長はシャレを言ふていに
社長ふとマッチの火をばさびしめる
菜つ葉服着て私が社長です
悪趣味な社長と秘書は心得る
社長室から榮轉のベルが鳴り
逃げるもんかと社長うまく逃げ
晩餐が社長と出來て羨まれ
お眼鏡にかなふた社員ゲニに似る
禿げてゐる方が社長と思ひきや
社長の碁よつてたかつて初段にし
灰皿へ社長の灰と僕の灰
（軸）もうそこに社長のゐない唄になり
借金も社長の方が大きいさ

路郎選

かほる 紀太
みつる 里十九
いわを 鮎美
春秋 豆秋
紀太 鮎美
里十九 豆秋
鮎美 春秋
豆秋 變人
春秋 夕鐘
變人 青兒
夕鐘 鮎美
青兒 路郎
鮎美 同
路郎 同
同

麻生路郎編著●柴舟漫畫

累卵の遊び

四六版一六〇頁・函入・漫畫三十二葉

川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで噛んで碎いて摺り餌にしたのが「累卵の遊び」であるとは著者の序文の一節である。

定價壹圓　特價八拾六錢　送料壹圓

阪大川柳會編纂●路郎序

川柳句集

大川端

大阪帝國大學の中で生れた異色ある川柳句集である。（四六版二〇〇頁）

本句集は非賣品であるが阪大川柳會に請ふて特に川柳愛好家のため頒布することにした。

殘本僅少至急申込みあれ！

頒價壹圓　送料六錢

橋本緣雨著
麻生路郎序

川柳句集

街の雜音

☆作家生活十三年、默々として吐き出した著者そのままの生きた姿、一讀再讀人生の底邊に觸るるものあらん。敢て薦む。

定價五〇錢　送料四錢

發行所

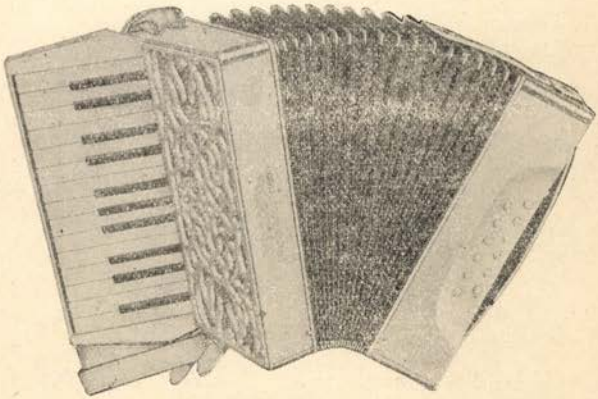
大阪市西成區玉出本通三丁目三六地　不朽洞

振替大阪三三〇三九七　電話天下二五二九

ヤマハ
アコーデオン

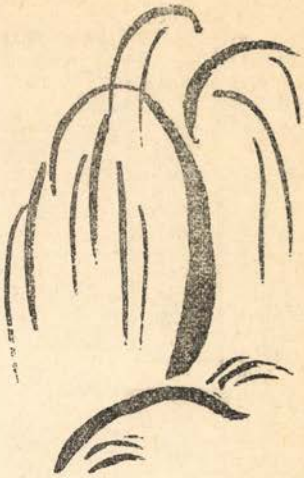
10號…¥10.00
20號…¥17.00
30號…¥23.00
40號…¥28.00
50號…¥40.00
60號…¥60.00

カタログ送呈



60號　ピアノアコーデオン

山葉ピアノオルガン製造元
日本樂器會社大阪支店
大阪市・西區・四ツ橋南
電話新町一〇七三番



武玉川二篇研究（二九）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(698)　梅に向て齒を鳴らす妻

省二＝『齒を鳴す』は大變殘念がる事。『梅見とは新板かはりました嘘』で、一杯食はされた細君が、いま〳〵しく思ふ。梅見とか花見とか、兎角道寄りをしたがる夫。

秋の屋＝妻が姙娠して酸い物を好み、梅の實をみて、齒を鳴らすのでは無からう歟。

東魚＝兩說とも肯けるが、どうも後說の方らしい。『向て』と强くある處が、さう思はせる。

省二＝『駒下駄でお庭の梅をぬすむなり』。『あたり見て嫁梅の木を二度ゆすり』などの類吟も多く見受けるから姙娠說を知らぬではなかつたのだけれど、『齒を鳴らす』なる言葉に、慾求する意求する意味が、確にあるか否や、疑問をもつた。齒の根を鳴らす、漢語式に强く言ふなら、切齒する。『武運に盡きしかと、拳を振り齒を鳴し』（曾我會稽山）は、殘念がつて怒る意だ。

秋の屋＝切齒するのではなく、櫻の實をみて、あれを嚙りたいと、齒を咬み鳴らすので、甚輕い意味だと思ふ。

(699)　詫言に若衆の母も手を合

省二＝母が出てきたのが、頗る複雜味がある。

秋の屋＝母親は放蕩息子の辯護士とも言ふべきである。

東魚＝若衆は色子の事か、單に、青年の事なのであらうか。充分解せぬ。

省　二＝色子として、母に、多分の複雑味を覚えたのであるが。

秋の屋＝色子は多く京阪地方より、江戸に出て來たもので、其親方といふ者は附いて居たらうが、母の附いて來ることは無からう。されば此の若衆は只の青年に相違ない。

(700)　娘か逃て髪結ぬはゝ

省　二＝心配で髪など結ぶ氣になれぬ。碌々眠れもせぬ母親。――娘とあつては。

秋の屋＝放蕩息子よりも、多情の娘は、一層母親が苦勞の種となる。

東　魚＝按じきつてゐる、哀さが、溢れてゐる。

(701)　二羽鳴雁も極月の聲

省　二＝寒雁をいふ。極月氣分を、一層身にしみさせる

秋の屋＝孤雁の方が一層淋しからうに、『二羽鳴』とした作者は、手腕が鈍いやうである。

東　魚＝二羽――番ひにして、一層の哀れさを感ずる。

省　二＝孤雁の方が、一般には採用される。『一羽づゝ宙に消えけり歸る雁』(梅實)であるが、まゝ『二羽つれて歸るや雁の嬉しなき』(交朱)もあり、原句も亦可ならむ。

(702)　興力町一人か二人よいおとこ

省　二＝興力の住む町一人か二人、興力にも好い男があるも云ふので、前句があれば一層働くのであらう。興力だつて多々益々好男子がゐた事と思ふ。奉行、諸司代其他を補佐し、同心の監督指揮に當つた。

秋の屋＝昔、私の宅の近傍に、興力町といふのが有り、其處に一人の好男子が居て、父の遊仲間であつた。

東　魚＝興力などは下情に通じてゐて、中々女に持てる好男もあつたであらう、鬼の樣なもの斗りではない。

(703)　くらい所で笑ふあやつり

省　二＝人形が笑ふ場面である。操人形師は物陰の暗い所で糸を操つてゐる。

秋の屋＝操人形の遣手は、舞臺の天井の上にゐて、其處より糸で操り、また人形遣が自身に淨瑠璃を語ることも有る。

東　魚＝面白い句である。解前說贅。

省　二＝『物陰』と置きしは、どう思ひ誤りしか、取消す影繪師とは異なる。幼時よく見物した。

(704)　一逃にげて口を吸せる

省　二＝接吻、一逃にげるところ、情趣がある。

秋の屋＝自若としてゐるのは、阿婆擦女である。

東　魚＝一度逃げる處が、全くしほらしい。それも手管の一と手とあつては恐入るが。

省　二＝『不斷櫻』初篇には、『一逃にげて抱つかせけり』

(705)　袖の梅きかぬは妻の心也

省　二＝袖の梅は醉醒藥。吉原の流連に用ひた句例が多い。その袖の梅が利かぬのは、女房の心境の反影關聯があるのだとは、さもありなむ。『女房の癪にさはるは袖の梅』『袖の梅あれど女房くらはせず』。

秋の屋＝ある場合には、藥も變じて毒となる。

東　魚＝袖の梅なんて何んが利くものか、と藥そのものにさへ（吉原で賣る故）反感を持つてゐる。女房が二日醉の亭主を、苦が〳〵敷見た處であらう。

(706)　泣子の口へしたむさかづき

省　二＝私は幼時、泣きだすと、酒を唇に塗つて貰らつたさうで、さすれば泣止むといふ。故に少年時から酒を呑む事は許されてゐたが、今日では呑まぬ。

秋の屋＝愛飲家の能くやる事で、下戸は看て苦々しく思ふ。

東　魚＝昔の人は、何んとも思はなかつたらしいが、私は上戸だが、小供には絶對にやらぬ。屠蘇でも心配だが、これはなめる位は許してゐる。

省　二＝『屠蘇をぬる乳房は誰か小盃』（江戸みやげ）、屠蘇は祝儀の意味のものだから、少しはよろしからう。『盃に這ひ懸る子も瓜の蔓』（武・十八）などの句もあれど、私の如き酒造事業に關係を有してゐても、――だからかも知れぬが禁酒狀態に入つてしまふ。宴會では以前からサイダ黨。

(707)　淺い新地朽るがつそう

省　二＝『淺い』とは

秋の屋＝寺院の門前町の、間口が廣く奥行の狹い、新地のことであらう。『がつそう』は合總と書いて、總髪のことであつて、大方浪人者が、此處に住んで、老朽るといふ意と思はれる。

東　魚＝『がつそう』にしてゐるのは、法印でゞもあるか

省　二＝總髪に結つたのは、浪人、醫師、山伏、僧侶等がある。

(708)　行合せねはしれぬ達磨忌

省　二＝途次、お坊さんに會ひ、聞いたから知つたものの、達磨忌などは忘れてゐた。舊十月五日。

秋の屋＝禪僧などの外には、達磨忌の月日を熟知してゐる者は、世間に尠いのである。

東　魚＝禪だから派手でないから、世間は知らない。『行合せねば』は途中で僧に逢つたと云ふよりは、偶々寺へ行つたら、達磨忌を修してゐたので、何のお法事ですと云ふと、達磨忌ですよと、きかされたのであらう。

(709)　山歸來かならず城の落る時

省　二＝山歸來を呑まねばならぬやうな時は、城の落る時に相違なし。

秋の屋＝『城の落る』とは、傾城の謎であらう。

東　魚＝城が落ちたり、鼻が落ちたりしては、助からぬ。

(710)　たからの市で聟はたおれる

省　二＝住吉の寶の市（舊九月十三日）。『飲ほして升を枕に市の月』で寶の市で倒れるところ、聟氣質。

秋の屋＝私には聟の倒れる、理由が判らぬ。

東　魚＝酒に弱いために倒れる。皆なにそねみ心で強られて……と解せぬ事もない。

省　二＝寶の市から梯子をやるところを、聟丈けに、市のみで醉ひ倒れて歸宅。

(711)　草履とりまでて息杖の息

省　二＝草履取丈け連れての、北國行ならば、身輕なわけだ。駕を急がせる。

秋の屋＝北國行と斷定するに及ぶまい。

東　魚＝駕に添ふて急いで行く草履取が、駕舁と同じ樣に息が合つて、行くさまであらう。

(712)　明地が出來て新しい棒

省　二＝空地が出來て、杭をうち、柵をたてる。

秋の屋＝平丶凡々

東　魚＝矢張り、前句によつては多少の味があらう。

(713)　合點の上で遠い寢所

秋の屋＝男女が互に情を通はして居るが、身を愼んで、夜は寢所を別にする、と言ふのであらう。

東　魚＝他人の手前、遠くしてゐるのだが、内々打合せずみで、よろしく出逢ふので、其處を合點と云つたのであらう。

省　二＝前二說は『合點』の内容を、單純か複雜かに解するにより、別れる。

隨筆

保土ケ谷より

福田山雨樓

初代川柳の墓碑

川柳始祖の墓碑が大震墓災の損害も受けず東京淺草龍寶寺内に今尙現存してゐることは誠に結構な悅ばしい事であるが、碑面の法號は『契壽院川柳勇緣信士』となつており、同寺の過去帳及祖翁に關した著述『元祖二世三世川柳墓參法莚會』――九世川柳著――にある法號『契壽院川柳勇綠信士』とは一字違つてゐるのである。祖翁の幼名は勇之助、俳號を綠亭と稱してゐたのだから『勇綠』の方が授けられた法號に相違なく、墓碑のは誤字を刻んだものと云はれてゐる。けれども苟くも墓碑を刻むからにはさう輕々して間違ふものではあるまいと考へられ、碑面が正當なのではないかと云ふ氣もするのである。これは何人かの努力に依つて確證を得て墓碑の誤りなら、誤りであるとはつきりして貰ひたいものである

次に句碑『木枯しや跡で芽をふけ川柳』であるが、從來大破してゐるのを今般全國川柳人の支援と『きやり吟社』の斡旋とに依つて再建の計畫が運ばれつゝあることは同慶の至りに堪えないしかるにこの辭世は柳多留にも其他の印刷物にも載せられてゐないらしく、菩提寺龍寶寺内に五代目川柳が、祖翁五十周忌の追善に建立した『木枯し』の碑を信ずるからであるに過ぎない有樣だ。この辭世についても何か他に嚴とした文獻明證が望ましいものである

右の二つは餘り史實探求に捉はれた慾かも知れないが、せめてこの二つ位は今明年中に解決が與へられたいと思ふ。

川柳翁の史實

初代川柳の偉業を追慕讃仰するわれ等川柳家にとつて、翁の全貌はおろかその片鱗だも正確な事はわからぬと云ふ狀態は、甚だ遺憾千萬な次第で、芭蕉翁が俳聖と尊崇されその一擧一動に至る迄審かにされた文獻資料があるの

と比較すれは、實に大變な相違である。しかも川柳翁の史實探求はこの上究めやうたつて、もう既に絶望の淵に立つてゐるのであるかも知れない。不幸にして若しさうだつたらどうすればいゝのか。そこには諦めの一手より外に殘されてゐない譯だ。

しかし只諦めただけではいけない。萬句合を通じ柳多留を通じて、翁が殘した不朽の精神をさへ受け繼いでおくならば、よしこの上の史實探求が徒勞に終らうとも、われ等の詩川柳は益々確固たる根を張り花を咲かせてゆくことが出來ると思ふ。

今日迄の史實では柄井八右工門翁の歩んだ道は、當時の所謂町人の生活以上に出てゐない。俗人として俗社會の雜踏にもまれたのに過ぎない。しかもその生活の中から民衆詩川柳を拾ひあげたのである。われ〳〵は川柳をその草創の期にあつてよく育てゝくれた祖翁の偉業に、滿腔の敬意を表するものであるが、彼も亦一個の市井人に過ぎなかつたと云ふ點（少くとも今日迄の史實に照して）において、寧ろ百萬の味方を得たやうなよろこびに浸り得るのである。祖翁の史實が審にされてゐない不滿を打消して、猶餘りあるよろこび（それは誇りですらある）を抱いてゐるのだ。

長野縣の川柳村

長野縣更級郡に川柳村といふ村がある。その讀み方も正しく『せんりうむら』でわれ等の詩川柳と何等か機緣があるのでばないかと、幸ひ同僚の俳人K君が同地方の出身なので過日歸國の砌調べて貰つた。

川柳村は歴史に名高い『川中島の古戰場』に近い一寒村であるが『將軍塚』といふ有名な古墳があり、この古墳に付ては立派な研究文獻書が發行されてゐる。ところでこの川柳村の名稱であるが、これは往年『石川』といふ字（あざな）と『二ツ柳』といふ字とを合併して一つの村が出來たとき、その兩字の下の字『川』と『柳』とを合はせて川柳村とは稱したのださうだ。今でもその兩字はそのまゝある。いはれを聞けば有難やではなくて、聊か失望を禁じ得ないがそれでもその川柳村が何となく懷かしく感ぜられ、機會があつたら一度訪ねて見たいと思ふ。

（寫眞カットは山雨樓氏）

川柳雜誌社 簸川支部創立十周年記念大會

日時 十月十七日午後一時半 於島根縣今市町驛前片岡旅館

兼題選者 麻生路郎師 福田山雨樓氏 米村あん馬氏

講演 麻生路郎師

簸川支部

尼子綠之助

川協と其の事業

川柳人協會の組織や、その目的については前號、前々號、前々々號で發表した通りであるが、本號へは其の事業の外廓を描いて參考に資したいと思ふ。川協の事業は川協でなければ出來ないやうな事業を撰みたい。

(一)年刊句集の刊行

私達川柳人のバイブルと云はれてゐる「誹風柳樽」は明和以後の年刊句集であるが、斯うした句集が、現在の私達にも必要ではないだらうか。曾て年刊句集の刊行を企劃した吟社がないでもないが、斯うした事業の繼續はよく一吟社の能ふところではない。假りに多少の困難を排して刊行し得るも、經費、選者、作家等が限られたる範圍となるため、權威ある年刊句集とはならない憾みがある。

これを川・協の手で刊行すると、すれば、すくなくとも如上の欠點を補ふことが出來ると思ふ。

若し全國的に出句せしめ、出句者は勿論、出句しない者にも之れを頒布するならば一部當りの原價は割安となるため刊行が容易である。

全國を幾つかに分割して、其の地方々々の理事がこれをまとめ、その地方の評議員會にかけ、名譽會員の贊同を仰ぎ之れを川・協の事務所で一括整理して刊行すれば各地方に於ける句風も尊重せられて誹風柳樽以上の權威ある年刊句集を刊行し得られると思ふ。出句數については分割區域内に於ける會員の按分比例に依れば比較的公平を保つことが出來やう。尤もこれが實現を見るためには知名の川柳人は擧つて協會員の資格を獲得しなければならない。

(二)公認選者

選者公認問題については多少の異論があるかも知れないが、選者の人物識見が直ちに柳界の向上發展に影響するものとすれば一部の反對はあつても、この問題の解決を一日もゆるかせにしてはならないと思ふ。これに附隨して選稿料の事にも及ぶべきであらう。

(三)川柳會舘の建設

會舘の建設に伴ひ、柳人宿泊並に歡迎送にについても特に一考する必要があらう。

前述の各項は川柳人協會の事業中二三の例を簡單に提示したに過ぎないので如何にせば柳界の向上發展に資することが出來るかは諸賢の御垂教に俟つ次第である。

―麻生路郎―

旗洗荘にて　花菱夫人・花菱・三太郎・路郎・山雨樓の諸氏　（柳氏撮影）

東京雜記

路郎生

東京はネオンサインの氾濫時代だ。ぎんざはオブコース、淺草の屋臺店のとんかつまでがネオンで表現してゐる物々しさである。私はこれ等の甘つたるい光線の中にあつて、ネオンの次に來るべき光線を考へてゐた。

♣

地下鐵は狹くて汚なかつた。

♣

ニュース劇場は僕をハルピンまで運んで呉れた。

♣

龍寶寺の若い娘さんは聰明だつた。山雨樓と私は墓石を濡らして歸つた。線香の煙りは縷々として明和へ棚引ひた。（九月十八日）

秋と酒と杉

西田艸樂

なあちろりこれから秋に親しまう　路郎

路郎師の言ひ分ではあるが、近來莓狩だの無花果狩だのと郊外電車が囃したてるが、莓や無花果で酒は呑めない。それには、松茸狩で雞肉のスキと來なければ本當ぢやない。

只に松茸狩でなくとも、秋は酒の一層イケる季節とて、前掲の名句も生れた所以でもある。

元來が下戸で、酒を語る資格はない筆者であるが、所謂上戸黨とは別の方面からなら、此の好季節を機會に酒を語る話題を持つてゐたのである。

酒と杉

杉ツ葉の玉ぶら下げる村酒屋
軒端杉で丸くする村喧嘩
村酒屋軒に天狗の巣をつるし
田舍の生醉杉の葉の內で出來
杉の葉の中からせなアよろけ出る

なぞと古川柳に見る通り、酒屋の軒端に酒林とて杉の葉を束ねて、藥玉の樣なものが吊されてあつた事は筆者も子供の頃二度や三度見た覺えがある。

酒の樽は杉材で造られる。杉の香りが酒に浸出して味をよくするのである。

由來酒と杉は甚だ緣が深いのである。物故されたが、かなり有名だつた藥學博士木村彥右衛門氏が、クリプトメリアエールとライスワイン（杉油と日本酒）の研究をされて、學位論文を書かれたのは、未だ筆者が寒書生時代で二十數年以前の事である。兎も角、酒と杉を科學的に明かにされたのは、大正以後の學術の現はれであるといつていいのであるが酒と杉の因緣に至つては、實に我國神代の時からであるといへる。

酒と三輪神社

杉の葉を上げ〳〵糸をたどり行き

謠曲「三輪」から出た古川柳である今春中學に通ふ子供と、萬葉古蹟行脚をして、初瀨を振り出しに、大和を此處彼處と歩き廻つた。初瀨の次に訪ねたのは三輪明神であつた。神に詣で、名に聞えた種々のものを見たり、官幣大社大神神社の緣起書なぞを貰つて、是非そこいらの好酒家に語りたく思つてゐた。

大神神社といふのは、倭大物主櫛眞魂命を祀れる宮で恐ろしい長い名の神樣であるが、出雲の大社、即ち大國主命と異名同身の神樣である出雲を緣結びの神樣として俗に信じられ、この三輪では酒造の元祖の神樣とされてゐる。一つの神樣の御人格が種々の方面に顯はれ給ふので別に不思議はなからう、私達は神農さんと俗稱して道修町にお祀りしてある少彥名神へお詣りするが、此の神樣と大國主神樣は御協力して　國土經營から殖產、醫藥の道、造酒の法なぞをお開きになつたので、三輪の

神様を酒造の元祖とするに不思議はない。

神酒（ミキ）といふ言葉がある。このミキといふ語は三輪明神に因んだ語である。古、酒を入れて神様にお供へする容器を瓰和（ふわ）といつた。ミカワのカを省いてミワになり、ワを省いてミカとなり、轉じてミキになつた。殿といふ字が建物の稱であるのを高貴の方を指す時に用ふる樣に、神様の御名を直接口にするのを畏多いとして、酒の器でお呼びする樣になつたのが大神（みわ）神社なのである。と社務所から發行される大美和になる刷物に記されてある。即ち大物主大神をミワノカミといふのは、とりも直さず酒の神といふ意味なのである

酒はのめ〳〵茶釜で沸せ、おミキ上がらぬ神はない。

デツカンショどころではない。畏れ多くもミキとは神様の御名である

神體山と杉

三諸（みもろ）つく三輪山見れば隱口（こもりく）の
初瀨の檜原おもほゆるかも　（萬葉集）

杉が枝にかすみこむれどみわの山
神のしるしはかくれざりけり　（千載集）

三輪神社を祀れる、古三諸山と稱へた山は初瀨から山續きで　周回約四里に亘るといはれるが、今では、初瀨の方側は木のない箇所や、雜木林なぞで何でもない山であるが、三輪に面した方は、杉の大木鬱蒼とした、神々しい山である。三輪神社は社殿があつて、御神體がない。ないのではない社殿の裏側の山が即ち御神體なのである。で、この酒の神樣の御神體には一體に杉樹が生え茂つてゐるといふ譯で、これが　昨日や今日の現象では勿論なく、鎭座まして以來の事であるので、その杉のある所以を深く知らないが、大昔始めて酒をお造りになつた大國主命は、やはり今の人間がする樣に、杉の木の容器に入れられたか、何か杉の香りとか、味とかを御利用になつたのではないかと想像して見ると大國主命も仲々化學者であつた樣に思はれるのである。

三輪の杉に就ては、謠曲に現はれ古川柳にも詠まれ、種々名高いが、酒と關係がないから省略したいが、兎も角、酒と杉の因緣話に三輪神社をお引合にお願ひ申した事は畏れ多いが、よほど緣の深い事だけは否定出來ないのである。

私の知つてゐる

大阪の奇人

高尾亮雄

奇人といふて適はしくなくば一寸變り者といつた風の人物を、大阪の私の知つてゐる範圍で選ぶとすればまア、次ぎのやうだ。

岡田播陽、これは大阪市井の奇學者として、また大塩平八郎通として

誰れ知らぬものはあるまい。この間も、賴山陽の事で、その造詣深い書き物があるといふので、出版の仲介をしたのが、これも變り者の福田宏一、校閲は福良竹亭老一諾大に快く引受け、さて原稿を熟讀に及ぶとこれは如何に播陽の著は山陽罵倒論であつたから、面喰つた竹亭老そのまゝ突返へしたか、どうか知らぬが三人とも變り者ぞろひだから頗る奇拔だ。次ぎに播陽の向ふを張る學者に北村佳逸がある。愛嬢兼子女史が逝いてのち、「老子」「孟子」「孫子」なんて矢つぎ早やに、一流の新解釋の本を續々出版した。で、誰れかゞ兼子の逆遺傳だ。なぞといつたが、實は親は親だけ、一枚も二枚も上だ。彼、實は明治時代からの浪花文壇の古老で、中途市井に隱れゐたのが、今は返り咲きに花々しい娘の弔ひ合戰最中。

脫俗の歌人に耳の遠い安江不空あり、和漢の詩文に達した近藤尺天翁あり、脫俗しかねてゐる坊主に土塔寺の森裕次と、佛師の田中主人は好一對の禿頭會員。「天聲人語」を去つた釋瓢齋もまだ〳〵野狐の方であり忍術研究家の大澤休象は近ごろ興行師に買はれたいと云つてゐるから俗中の俗だ。同じ堺市に岡村槐軒とお伽の兎のやうな楠麿老人がある。酒に醉つてゐる時だけ麻生路郎も一寸仙に近い。食滿南北や、岸本水府なんか俗中の粹仙か。私の知人で石田勉といふ畫客があるが、夏冬とも一着のルパシカ姿でいつでもサボをはいて、コンクリートの大阪の街をゴト〳〵鳴らして歩いてゐる、家はどこだか分らぬ。先づ奇人だ。

死んだ滿洲語、女眞語學者の渡部薫太らも奇人といへばいへない事もない。老いて篤學の士であつたが流行らぬ語學者だけに末路悶はれであつた。

福田宏一、近ごろ福園といふ東洋料理を初めたが、吉林の奥地で人蔘餌で育つた蛤蟆ハマといふ珍味料理を出す。ハマといふから貝類かと思つたら蛙であるさうな。西太后が精力絶倫であつたのも、これを食した爲めだといふ効能、友だち甲斐に食ひに行つてやつて下さい。若返ります。

未來の奇人に入れられるかと思ふ男に乙三洞翁があるが、古本大學のおやぢはどうしてゐるやら。

死んだ音樂家澤田柳吉も大に變つて居つたが、これは別に一文を草したい氣がある。

川柳趣味展覽會

豫想以上に好評で大盛會裡に終了いたしました。川柳家各位の御好意を深謝いたします。　松本しなの吟社**石曾根民郎**

『夢』の句是非

―川柳指導講座―

塚越正光

さて例によつて私達の先輩はどんな『夢』を見せて呉れたか、思ひ出すまゝに記すと

音もなく夢の釣鐘落ちて來る　木倒人

ぼんやりと夢と雨とが殘る朝　綠天

夢の音時計になつて眼がさめる　右近

初夢に金を儲ける二階借　鯛杖

夢に入る團扇だん〳〵重くなる　酢豆腐

などがあるし、路郎氏には

娘十八アダリンの夢

といふのがあるが、これは本講座の作家達は十七字型ばかりではなく、川柳には十四字型もあるといふことを知つて置くだけでよいと思ふ。十四字詩は名作家ですら往々失敗するほど難かしいからで、まづみなさんはそういふ句型のあることを承知してゐることだけで充分である。そこでみなさんはどんな『夢』を見せて呉れるか檢討してみやう。

金の夢跡切れて淡き失望

若しこの作家がプロレタリアだつたら淡き失望ぐらゐでは濟まない筈である。裝へる階級意識は句にしてもばれ易い。例へば新興川柳作家の句でもその通りで、しんからの新興川柳作家のものにはうたれる力が感じられるが、追隨者のそれには迫力がない。況して自由律作家の作品にはそのけぢめが劃然として觀取出來る。この句も自由律を眞似たのでなければ幸ひである。淡き失望なんてさもしいことを言はずに

金の夢途切れて堅い敷布團

とやつぱり最初のうちは十七字にまとめることを心掛けるべきである。破調や自由律はそれからでも遲くはない（句主廣島縣芳泉君）

夢程も儲けでゐない小商ひ

この夢程は共感を伴はないが、作家としては『夢』があ

るのかも知れない。そこでその『夢』を尊重すれば

夢程は儲けてゐない小商ひ

幻滅の感じを濃くしてみるのも一の手法である（句主大阪淡路坊君）

鑛山家夢にあたつて又願ひ

又願ひを吉夢の通りになることを希ふ意味にとるとしても、鑛山家の家が邪魔をしてゐる。家とは專門家を意味してゐるのだから、中七以下がそぐはない。そこで

鑛山を買ひ夢を逐ひ夢を追ひ

と素人の方へ轉換してみる方が良いのではなからうか。（句主朝鮮石燈籠君）

夢にみた事で母から手紙が來

夢と母と手紙は川柳のテーマとして餘りに使ひ古されてゐる。だからといつて新しい作家が使つてはいけないといふ理屈はないが、作家が先輩の句を絶えず注意して讀んでゐれば必ず詠み古された境地に安住しては居られない筈だが、先輩の句を知らな過ぎる作家の多いことも事實である。それは決して昭和柳壇の榮光ではない。われひと共に良心的に多讀に努めたいものである。（句主大阪水客君）

正夢であり たい 官報見に急ぐ

受驗生の父兄であれ本人にもせよ、あまりに非科學的ではあるが、そこが人情の發露だとすれば、どうすることも出來ない。

正夢であれ官報を見に急ぐ

と調子を整へるだけにして置かう（句主大阪澄風君）

兄に似たような夢見る講義錄

この兄に似たようなは作家の獨合點で共感性がない。だから私達をして首肯かしめるものがない。從つて私にも手の下ろしやうがない譯である。（句主仁川府奇文君）

諦めたはずに夢見る不肖の子

斯ういふ劇的要素を多分にもつ句はともすれば、小取廻しが利かなくなる。この句も私が手をつけるとすればもつとスケールを小さくすることになるから、たゞ字句の修正だけにとゞめて

諦めた筈を夢見る不肖の子

としたが、私自身も不滿を感じてゐる。（句主大阪靜城君）

びつしよりと夢でよかつた夢がさめ

中七以下をそつくりそのまゝの句が先輩にあるが上五が思ひ出せない。そこで

金の番夢でよかつた夢がさめ

と添削して見たが、どうもあり相な氣がして心平かならずである。（句主大阪さいち君）

あの言葉みな夢である倦怠期

倦怠期といふ流行語を驅使するには、この句のやうに夢を比喩的に扱つて感傷な句とせず、もつと端的に倦怠期の夢を描いて貰ひたいと思ふが、この欄の作家にはちと無理

かも知れない。

怖い夢面白い夢倦怠期

では餘りに作家の意圖から選いものとなつた。（句主大阪銀濤君）

夢に見た友は異國の土と消え

事實を抂げることは出來なくとも、イメージュを加味することは作家の自由である。それが川柳するといふことなのである。異國の土と消えた友の見たであらう夢をでも、そして彼氏を偲ぶことも彼氏へのよき追憶となるであらう（句主　今治市　鶴聲君）

寢ぼけ顔夢の人形を欲しがる子

前號で『手紙』の小貝君の場合に言つたことをもう一度繰返す愚を避けて

夢の人形を欲しがり困らせる

と添削して會得して貰ふことにする。（句主　島根縣さわだ君）

夢で逢ふ積りうつかり熟睡し

茲まで來てしまつては、後もどりをしなければならない添削を要さぬ句の柳勝君の句を參考にされたい。（句主　大阪　春榮君）

亡き姉と夢て喧嘩をしてゐたり

ひとりぼつちで育つた私にはこの句のやうな經驗はないが、弟や妹なら兎も角も目上だけに

亡き姉に夢の中でも叱られる

ぐらゐの喧嘩の一歩手前でとゞめたいが、どんなものかしら。もつと飛躍することを許して貰へれば

いぢめつ兒夢中までいぢめに來

としたいとも思つたが、それでは與へられた埒外へ出てしまふと思ふ（句主大阪六郎君）

ナプキンが夢でなかつた不倖

『手紙』でもこの作家には兜を脱がされたが、殘念乍ら茲でも兜を脱がざるを得ない。さてはにが手かとも思ふが、『そもやそも汝ナプキン何の化物ぞ』と大聲叱蛇した所で、みんなに笑はれる位が落かも知れない。何はともあれ句主の說明を求めることにしやう。（句主　尼ヶ崎市　南濃路）

夢に來た父も涙をためてゐた

こんど初めて見る名の作家だが、却々いゝ句境を持つてゐる。そして表現も惡くはない。萬全を期すために假名づかひを修正すれば、

夢に來た父も涙をためてゐた

たつた一字だけだが、このたつた一字が川柳のやうな短詩形にゆるがせにはならないといふことを銘記して置いて貰ひたい。（句主　大阪　イトエさん）

夢としてニ十一歳をやんでゐる

病んでゐることが夢なのか、二十才までの人生が夢なのか。そこのけぢめがはつきりしないのは、自分だけの句だからである。自己の藝術だから自己にさへわかればそれでいゝとは言へはない。どんな藝術だつて共感を伴はないものはない……鑑賞者或は批判者の知識の深淺の差こそあれ……殊に社會共感を命とする川柳にあつては、それがより濃度になければ佳き句とは言へない。茲には

夢多き青春ニ十一を病み

と句意を尊重して辭句を整へるだけにして置かう（句主　大阪　向治君）

目覺へ續きが見たい夢を覺め

この作家は前掲の先輩の句『夢の音時計になつて眼がさめる』をよく玩味することをすゝめて指導の目標として貰ふ。（句主　鳥取縣　小判君）

茲までやつと一つの重荷を下ろした氣がした。もう隣のラヂオは子供の時間で童謡を歌つてゐる。氣がつけばいつも夕飯時分に旅情を味はせて呉れる裏のお寺のひぐらしも鳴き止んでゐる。何うやらいつもより夕飯が遅れたが、暑中休暇の一日を完全に費やした甲斐があつてほつと一息……晩には銀座へでも出かけるかな……あつ左様だ、何うせ今日は川柳に費やしたんだ。去年の夏以來中風で寝たつきりの先輩劍珍坊君を見舞ひに行くことにしよう。豫て矢野さんから『このあひだ持つてつてやつた中風の藥の効めをたづね乍ら、君も見舞つてやつて呉れ』と言はれてゐたのだつた。だから劍珍坊君を見舞に行くことを今日の川柳に費やした一日が有終の美をなすことになる譯であると、ひとりうなづいたが、おつとまだ出かける譯には行かない。この集句の中で添削を要さぬ句があつたつけ。それを記すのを忘れてはこの指導講座の方が有終の美をなさなくなる。

夢で逢ふ望み抱いてけふもねる　柳勝

あの夢のつづきが見たい戀心　世間音

いゝ夢のさめて境遇意識する　小貝

夢にまで費の遊びを見は續け　惡源太

さて最後に私の句だが、どうやらみなさんの指導にはなれ相もないのを悲しむ次第である。

相塲欄果敢ない夢を持ちつゞけ

川柳人協會にお入り下さい

川柳人協會はホントの川柳を社會に弘く知らせるためと川柳の愛好者がお互ひに仲よく手を繋ぐために生れた横の運動をするのが目的です。從つて協會の總會は全國各地で次ぎ〳〵に開會され、斯界の大家が出席して講演や句作によつて向上發展を期する一方、相互の親睦を圖る機會を作りたいと思つて居ります。川柳人協會が主體となり各地吟社の共同後援で大會なども開きたいと存じます。

會員は毎月『川柳雜誌』といふ柳誌を配布される外、諸會合に際しては會の性質により入場料の割引又は免除、其他いろ〳〵の特典を受ける權利を持つてゐます。入會は誰でも何時からでも出來ます。申込書に會費一ケ年分三圓、半ケ年分一圓六十錢を添えて協會へお送り下されば正會員章をお屆け致します。送金は振替（大阪三一五一四）を利用して下されば一番安全ですが、小爲替か郵券（二錢以下）でも結構です御友人にもおすゝめ下さい

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

川柳人協會

電話 天下茶屋二五七九番
振替 大阪三一五一四番

理事長 麻生路郎

◇今までに『川柳雜誌』を月極又は半ケ年極で購讀してゐられる方で入會を希望される方は更に一ケ年又は半ケ年分の協會費を納納され、は殘存誌代の月數だけ延長して正會員章を送り其の月から正會員の資格が出來ます

切……取……線

川柳人協會申込書

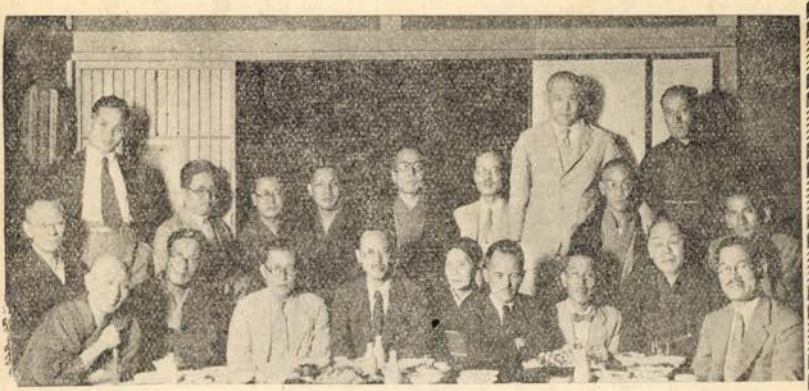
住所　市　區　町　丁目　番地

氏名　雅號　職業

會費　年分前納の上入會申込みます

川柳人協會御中

川・協・の・頁



川・協に關する東京懇談會（寫眞）

東京　川・雜東京支社長福田山雨樓君の肝煎りで九月十九日夜芝濱松町田中すゞか居へ帝都柳人の諸名家達にお集りを願ひ、川柳人協會とは如何なるものか、その目的、その事業等について語り、種々の質問に應答し、川・協が將來の柳壇建設のため重要なる役割を爲すことの御諒解を得ましたので出來得る限りの御援助をお願ひし、次いで懇親の小宴を開き十時散會いたしました。

當夜參會せられた方々の御芳名（出席順）

正光、荷十、嘘夢、杜若、花川洞、空靈、啞三味、瑤天、周魚、玉兎朗、太郎丸、信子、茱六、三太郎、雀郎、星文洞、〇丸の諸氏と山雨樓、路郎の十九名猶差支への爲不參せられた方々のありました事を申添えます。

横濱　右の懇談會散會後、〇丸、啞三味、星文洞、山雨樓の諸君等と共に雨を衝いて車を横濱に飛ばし、新倉裕侍君の通夜に臨み、燒香後、横濱柳人諸家に迎えられ、羽衣町の赤瓢箪に於て、川・協に關する事業の説明をなし、質疑に應答し之れが賛同と支援を懇請いたしました時に午前一時半。當夜參會せられた方々の御芳名（順序不同）懐窓、柳業、啞三味、星文洞、車山、兎猿子雨垂、意情、祝翁、紅翠の諸氏と山雨樓、路郎の十二名。更に車を飛ばして午前二時保土ヶ谷の山雨樓居を驚かし一泊いたしました。

松本　二十一日夜、翁堂喫茶部の三階で松本市並びに近郊の方々に迎えられ小生の座談會を開いて下さったので柳談と川・協とを合せ語りました。

當夜參會せられた方々の御芳名（順序不同）風谷、兵馬、久二、民郎、寄峯、松南、創道、年秀、專人、正司、吐句堂、多華思、信吉、靜風、汗青、月明、呼雲莊、林鐘の諸氏と路郎散會後有志の方々が席を松本館に移して歡待していただきました。

以上各地に於きまして川・協の有意義なことが認識せられ且つ賛同を表明され不肖への激勵の辭を惜しまれなかつたことは意を強くするものがありました。各地の諸氏に感謝いたしますと共に甚だ簡單ではありますが會員諸君に御報告申上げます。

京都　東の旅から二十二日夜に歸阪いたしました私は九月廿三日夜仲源寺で開催された京都各吟社聯盟主催の初代川柳忌に臨み、柳壇の將來をトする川協を語り、參會者一同の賛同とこれが支援を懇請いたしました。

☆川柳始祖句碑再建の據金募集の締切が十二月末日迄延期されました。

一路集

募集句

覺悟

福田山雨樓選

覺悟しても姉の角隱しふるえ　小貝
更生の覺悟しづかに下獄する　いの助
覺悟した通りになつて狼狽る　古杖
母親は娘の覺悟に泣いてゐる　一劍坊
借る覺悟きめたる父の深い皺　瞳童
そうなれば妾にだつてある覺悟　七歩
生活を縮めてはるかなる覺悟　木履
記者達に覺悟を示す女親　柳園子
こちらにも覺悟があると負けて居る　正柳
三面は覺悟の自殺と片づける　晴二
つまらないとこに極道覺悟おし　惡源太
・獨身で暮らす娘の覺悟なり　菊路
悲壯なる覺悟瞳が燃えてゐる　芳水
覺悟をした腕組みを案じられ　葉光
スクリーン俺も口說から覺悟する　虻の麿
笑はれる覺悟でホームドレス着る　靜城
ともすれば覺悟にぶらす喰にて　澄風
覺悟して來た濱月が碎けてる　陽出男
ひきがへる覺悟の姿とも見られ　水客
覺悟してゐる妓へ女將くどいこと　同
かたくなゝ父がうたづく娘の覺悟　觀月
衝立の横で覺悟を決めるなり　同

十　秀

罰盃を覺悟の前にのろけ出し　柳昌
最後への望みをかける手術臺　木守
覺悟した氣で河豚ちりへ誘はれる　其奥
送別の覺悟の酒に未だ醉はず　一騎
ロープウエー覺悟ちらと動き出し　美知夫
覺悟だけ徵兵官はほめてくれ　憲一
女事務首は覺悟の繼をする　章泉
歸らない覺悟が月の驛に立ち　柳笑
敷島を吸ふて女將に覺悟あり　觀月
覺悟した全策割に顏のきゝ　徒歩

五　客

盃洗で飲む覺悟をばこわがられ　曉童
酒を斷つ覺悟の前へ酒が來る　冠光
滿洲の覺悟もあつて見込まれる　春巢
覺悟して來た東京が恐くなり　石燈籠
口髮を落すお客へ念を押し　一角

人

灯の下に覺悟した妓の青白し　さわだ

（評）自殺するのでも高飛びするのでもない。餘りに若い身空を切賣りする悲劇の前に人の親は泣いてやるがよい。

地

乾杯のかち合ふ音にある覺悟　木履

（評）壯行會の宴酣となる頃、送られ、選手の胸は興奮の坩堝と化し、乾杯の聲援に感激の瞳は燃えて必勝の意氣を眉宇に漂はすの圖。

天

朔風へ移民となつて來た雄圖　義風子

（評）滿洲の冬は極寒凜烈、滿目蕭條遠き地平線に明け暮れるのである。雄々しき壯圖を抱いて渡滿した同胞の安否や如何。

噂

色々な噂殘して轉勤し　惡源太

三度目は父も噂に耳を貸し　菊路

封切の噂に晝を女事務　一騎

昇給の噂うるさくねるばかり　柳笑

噂とは別に緣談すゝめられ　古杖

御用聞き變つた噂聞いて行き　澄風

ひろがつた時分噂の主はゐず　其奥

嫁に行く噂失戀した噂　晴二

噂のまんま空家になつてゐる　美知夫

宜敎所本部の噂など知らず　憲一

噂ふと非番巡査の耳に入り　水客

吉田水車選

いゝ噂歸（る）帽子のつばを下げ　英三

味方あり敵あり噂面白い　同

本人の氣持も知（ら）デマが飛び　春巢

そんなこと言ふて（まんの）と酌（ま）こぼし　海棠

佳吟

遠慮なく噂の中にもう生れ　英三

人の噂も七十五日美爪術　義風子

其の噂世辭の（つもり）マ言ひに來る　蛇の磨

夏みかん噂に馴れてゐる女　葉光

噂するバケツの水がこぼれ（ま）す　觀月

（軸）噂（また）大臣に（まで）祭り上げ　水車

屏風
襖
表裝
一式

山守表具店

大阪市住吉區阿倍野筋三丁目七
電話（呼）番〇六四五

表裝の好期を失はぬやう！
御一報下されば直にお伺ひ致します

いのちある句を創れ

各地柳壇

投稿清規

一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
二、文字正確明瞭に記載のこと
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月廿五日とす
五、投稿先は本社宛

阪大川柳會九月例會（大阪）

九月二十五日　於惠濟會館　丸島利生報

稽古、腕、兵兒帶、雜吟

ちと覺えなはれと稽古叱られる　柳秀
笑はれてゐるとは知らず字を習ひ　同
ステップの足つきで待つランデブー　同
お稽古をすまし師匠の茶をよばれ　君女
稽古三味　同なじとこで又つまり　同
お料理の稽古も嬉し嫁ぐ前　同
御近所にちと迷惑なバイオリン　同
有閑の稽古妾のそれに似て　方正
お稽古に縫ふのに柄の色合の　利生
上達のせぬステップをリードする　路生
どうしても思ひだされぬ撥をもち　同
中飛車がヤット防げるやうになり　同
働いて娘を着せて出す稽古事　芳一
色男稽古仲間にそしられて　たけを
お師匠はんの機嫌へ目ひき袖をひき　栞
居催促へ花の稽古の娘が戻り　芳一
月謝だけ戴けばよい稽古振り　たけを
お稽古に身を入れだした嫁き後れ　栞
卑屈さは胸にたゝんでお辭儀をし　貞三
世に負けじ胸病む友の筆のあと　同
兄弟がそろうて胸に金卸　淺女
何事も胸にたゝんで嫁に行き　同
電話口胸の動悸はきかすまじ　芳一
胸探る積り冗談言つて見る　同
頬紅に胸の病は隠れてゐ　柳秀
追ひついた所で女は胸を撫で　同
胸襟をひらいて飲めば度を過し　同
企みを胸に秘めてバアの隅　同
心臓も踊らず四十過ぎの戀　路生
心臓をつゝみそこねし戀なりし　同
胸算用出來て銚子を追加する　栞
萬事胸にあると云ふ仲裁の頼りなさ　千秋
兵兒帶を取り合ひしてる子澤山　柳秀
兵兒帶の巾でお上りさんと知れ　千秋
兵兒帶の散歩兩手は前へ來る　利生
兵兒帶の足らないお腹笑はれる　たけを
父の代理へ兵兒帶も借つてゆき　同
娘十八三尺帶の締めどころ　正甫
まあ上りなはれと兵兒をつかまれる　同
兵兒帶の大將と夜店呼び戻し　路生
兵兒帶の結び目たゝき出してやる　同
兵兒帶で出るが嬉しい夜店なり　同
兵兒帶で子を負ふ程に世帶なれ　同
兵兒帶を結びかへてる乘り後れ　同
看護婦も寮へ歸れば兵兒を締め　利生
シャンとしめなはれと兵兒帶叱られる　路生
退院は母が兵兒帶しめてくれ　たけを
くびをつれとの兵兒帶にはあらず　路郎
白靴の誇りサラリーマンのもの　貞三
口紅の赤さに母の愚痴を聞く　同
ペシャンコの煙草を見つける衣更　同
二科展の裸婦の如くに太つてゐ　路生
心臓の踊らぬキスも面白し　同
閑人の忙がしそうな觀光車　千秋
老眼の勿對らしい執務振り　同
事ごとに絡んで見たい酒の辯　柳秀
相乘りの貧乏ゆるぎ哀しけれ　栞
這へる子の持つたを大人取り上げる　同
陽射しのにぶさ薄着垢じみて　方正
燈火親しむべし胃散買ひにやり　たけを

管制へ街は悪魔の相となり　利生
御機嫌を損じともない酒をつぎ　淺女
防毒面吸ひつき相にやつてくる　路生
別荘に育ち天幕で寢て見たし　芳一

川柳雜誌社　**天王寺句會**（大阪）

九月二日　於日の出湯　須崎豆秋報

女湯、停電、酒癖、大風
分讓地、黒子、トマト

女湯へ叱られてゆく男の子　青馬
女湯で姿ぐらしを見ぬかれる　德三
番臺を緊張させる女くる　朱馬
停電にわるいマッチを見付けられ　天國
停電へ校正係背伸びをし　豆秋
停電へ遠くの空の稻光り　榮壺
寢てしまふ酒をこどもがさみしがり　朱馬
あの風によくも殘つたこんな家　彩泡
大風の進路が變る朝の記事　茂水
大風へ信號燈は赤のまゝ　豆秋
分讓地へ第一夫人連れてくる　葉光
分讓地僕のきらひな虫がゐる　天國
一儲けする顏が寄る分讓地　柳笑
向ふ向いた家一軒の分讓地　榮壺
分讓地斜に拔けるナツパ服　茂水
來て見ると足地の悪い分讓地　蝶之助
分讓地此所しばらくはゴミを捨て　同
運命は變り黒子は元の位置　同
逆境をいつそ黒子の故にする　朱馬
泣き黒子妾暮しに甘んじる　德三
注文は旦那が好きと言ふトマト　其奥
村の子にトマトがうまい秋日和　德三
Bンチ、トマトの色が未熟なり　同

尼崎句會（兵庫）

九月三日　於住友伸銅工業所　橋本路風報

花、電話、月、橋

花なんぞ持つて男の安つぽさ　美知夫
公職を秘めて花環の送り主　廣斗
借電話足袋のよごれを恥ぢて來る　遠見路
眉半分引いた電話の忙しさ　美知夫
借電話ことんまでは言ひ切れず　南濃路
デツカンショ學生らしい月見なり　美知夫
月光浴びて夜業尊し　路風
見送人船出の月を褒めちぎり　素峰
月あびておらのキャンプは面白し　南濃路
月なんぞかまわず圓タク突ッ走り　遠見路
橋までは送つてもらふつもりなり　美知夫
橋へ來て歡樂街の裏を見る　素峰
もう少しお聞きしたいと橋により　南濃路
まつすぐな風がほしさに橋へ行く　峰月

川柳雜誌社　**今治句會**（今治）

九月三日於貯蓄銀行支店　月原宵明報

鳴子、踊、停電、舌、水兵
撒水車

ハイキング鳴子へ來ると皆んな引き　曉童
鳴子から〳〵今日もお天氣一風　同
今日も亦親の無い子がひく鳴子　同
鳴子いま夕立と云ふゆれを見せ　曉童
孫の守鳴子ひつぱるだけの役　香方
踊りの輪月があらうが隱れよが　一風
理不盡な親へ踊り子疲れはて　宵明
新宅の嫁御踊つた事でもめ　曉童
盆踊りしつとり山の肌もぬれ　同
停電へ鉛筆もつたまんま立ち　文庫
停電へ年頃の身のキッとなる　宵明
停電へ港の汽笛響くなり　香方
停電へ猫が一匹現はれる　宵明
乘替えたバス停電の街を過ぎ　香方
卷舌になる傾向を妻おそれ　同
御地馳は舌で受取る田草採り　一風
盛り場で水兵腹が減つて來る　宵明
撒水車歩き乍らに話すなり　曉童
撒水車市長の顏も知つてゐる　同
街路樹の蔭で汗ふく撒水車　一風

阪大川柳會八月例會（大阪）

昭和十一年八月二十五日　於惠濟會館　九島利生報

尺八、辭世、釜、雜吟

モー吳れる頃と虛無僧息をつぎ　芳一
ちよこなんと坐り尺八斜にかまへ　方正
尺八がきこえる方の窓に立ち　たけを
尺八の稽古は顏を笑はれて　同
歌口をしめした程に鳴りもせず　正甫
尺八は捕り手の中で强くなり　貞三
一しやくり此所を聞かせる胸を張り　君女
尺八は自己陶醉の眼をつむり　柳秀

返り討にあひそうな虚無僧ふいてゐる路生
物陰で聞くを虚無僧 知つて吹き 芳一
尺八で渡り合 ふてるいゝ男 栗
軒毎に吹く尺八は淋しいぞ 利生
月もなし尺八遠く涙まくら 貞三
悟れるかの如き辭世の哀しけれ 栗
死ぬるのに何の辭世の遺言の 利生
あやしげな歌を殘して二人死に 同
俗人の有難さ辭世などよまず 同
云ふことは世に入れられず辭世めき 方正
辭世など詠んで成金死んで往き たけを
辭世のひとゝこを檢視よみなほし 同
絞首臺悔悟の一首子に送り 正甫
辭世は作つたが老將死にもせず 千秋
近作が辭世になつた不仕合せ 同
手が動くだけで辭世の聞き取れず 柳秀
床あげてみれば辭世が書いてあり 君女
しようむない辭世をよんであいつ死に 路生
僞りて僞りて辭世の言葉まで 貞三
借金はそしらぬ顔の辭世なり 栗
辭世吟命はたしいものと見え 柳秀
訪ねれば茶釜の部屋へ坐らされ 方正
釜底の飯を食はさぬいゝ女房 柳秀
一つ釜で育つた話借りに來る 栗
その日〳〵の釜が質草だ 湧三
釜開きお世辭いひ合ふ人ばかり 同
文人醫お釜のやうな山をかき 路生
女將もう金の茶釜を聞きあきる 同
宿替の車に釜の置きどころ 同
新婚は嬉しい釜の水加減 同
夜逃げする釜と見込んだ紙屑屋 同
解消は近かし釜のさびたまゝ 同
お二階へ釜の火加減たのんどき 同
陣痛に空釜をたくあはて方 柳秀
神前の釜超然とさびを見せ 筑川
純金の茶釜のお湯は酒臭し 方正
稲世帶輝くは釜だけでなし 路郎
共稼ぎ今日は亭主が炊きつける 同
落籍されて一升釜を炊くといふ 同
ドンファンになつもみたい夏の宵 貞三
親父さん掛聲だけの大掃除 芳一
咳一つ無駄な女をふりむかせ 柳秀
金儲け去勢をされてから儲け 利生
つきとばす樣に球審アウトにし 路生
あれは背がこれは顔がと嫁さがし 芳一

川柳雜誌社 **神戸支部句會** (神戸)

九月六日 於明珠居 西村明珠報

天井

天井の白さがせまる手術室 吉左右
天井へ濕布の水が反射する 明珠
新築の天井褒めて見上げられ 華水
天井の風船父を立たしたり 同

川柳十七日句會 (島根)

於和田居 森山さわだ報

子、罪、初秋雜景、書寢、海

あんな子では無かつた筈の金使ひ 一鴻
水にやけ白にやけ河童の子が歸る 同
子の罪として見逃がせぬ癖に病み 獨仙
あゝ罪が身にしむ秋の風にふれ さわだ
成功の裏を貫く罪惡史 綠之助
兒の瞳らん〳〵秋はブドウの下に居る 朴泉
雀もう早稻をねらつて首ひねり 獨仙
風鈴をさみしく思ふ九月も二日 綠之助
虫の音に立身傳は更けて行き たけし
久方の制服姿秋をそへ 勇
木の葉から秋は黃色にうれはゞめ 同
ハンモック俺の無錢を搖る夢 獨仙
書寢からさめて若さの力こぶ さわだ
親も子も書寢南天の葉がゆれる 同
ハイキング海の匂ひに元氣づき 一鴻
海に來てひやけて居ます旅日記 たけし
海暗く夕立ち雲の通りぬけ さわだ

川柳雜誌社兵庫支部 **岬柳社小集** (兵庫)

於久米雄居 靜水報

雨、女

お叱りを受けた歸りの道が雨 靜水
新柄へ女振り向かればならず 久米雄
コンパクト何かうれしい手付なり 同

みをつく詩 (大阪)

影、罪 大西八歩報

君の影嬉しく月と並び行く みつる
お互の罪へ淋しい子に育ち 八歩

川柳雜誌社篠川支部 **八月句會** (島根)

八月十五日 於山内凡愚居尼綠之助報

蛇、恥、老人、バナナ、底　華村
その次は言へず秋を抱きしめる　羅門
むしろ輕蔑され切つてゐる羞恥　羅門
蠅一つあしらひかれたお嬢さん　好郎
しみ〴〵と母の白髮に見入る宵　海棠
老ひし父眼鏡の奥に秘めし過去　朴泉
老人の嫌はれてゐる咳ばらひ　綠之助
二人來て安いバナナをまぜかへし　同
バナナむく二人へ女中遠慮する　雷門
耳の底痛い言葉となつてゐる　羅門
どん底に生きる日記の一ページ　同
まだ底がある炭坑のトロッコ　さわだ
町内で上席といふ年齢になり　奈翁詠
蠅一匹蛙はそれとかまへたり　華村

川柳雜誌社

今治支部句會（今治）

月原宵明報

弱點、蛙
弱點をつかれ子供を抱いて來る　心府
弱點があつて御無沙汰がちとなり　同
宵寢して蛙の聲が夢となり　同
娘賣る話蛙が聞いてゐる　曉童

湯の村對座吟

九月一日　於有爲郎居　金井有爲郎報

月給、ガラス戸、迷
サラリーをもらふ判古の掃除する　有爲郎
ガラス戸へふれた指先からの秋　同
保證人へ迷惑がゆく不倖　同

川柳十七日句會（島根）

森山さわだ報

夜、茶椀、障子、聲、初戀
夜更かしのたたり目脂をふいてゐる　綠之助
夜の街の明かるさ君と別れ來て　さわだ
茶椀の音を聞いて又寢る日曜日　華村
手を一つ打つて茶椀屋よくまける　凡愚
茶椀酒日輪樣は眞上です　綠之助
子の茶椀なんぼでもある蓄所　同
茶椀の音から新婚の朝が來た　華村
茶椀の白ろさも二つぎりなる世帶　綠之助
茶椀にも個性があつて面白し　さわだ
はつきりと障子の影を見て歸り　枯風
切り張りの母兼立たす子が二人　綠之助
切り張りもして新妻のつゝましく　海棠
葭障子古びし中に老夫婦　綠之助
障子から洩れる陽ざしに秋うごく　同
切り張りもうれしい妻のたばね髮　さわだ
一聲も聽き洩らすまい野球狂　獨仙
殘された西瓜小屋にも虫の聲　同
產聲大きく俺の子だ俺の子だ　一鴻
秋晴れを行商隊の話し聲　朴泉
無心云ふ聲は微かなものとなり　同
音頭取りマイクにほこる鄕土色　海棠
初戀もあつて中學五年生　凡愚
初戀の二人に嬉し天の川　さわだ
雨もよし初戀の日の思出に　同
ゆめ〳〵初戀は夢々朴泉
桃色の封筒戀愛の第一課　海棠
アルバムに笑ふ青春の一頁　同
初戀をもてあそばれただけのこと　さわだ
初戀は流れの泡よあつけなし　海棠
初戀は遠い〳〵國の王子樣　久津夫
初戀に支配されしは過去なりき　枯風

本社京阪神各支部
聯合忘年川柳大會
は十二月十三日、例年の如く盛大に開催致します御聲援を乞ふ
幹事一同

柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一擧手一投足をこの展望欄ですぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。

催し

▲京都川柳社廿五周年記念大會は路郎、久良岐、水府、紋太、溪花坊の諸君等を迎へて十一月一日民政會館（市電河原町御池下車東へ一丁）午後五時から開催されるさうであるが盛會を祈る▲川柳こがね吟社（岐阜）では第五十號記念句會を十一月一日（日）午後一時眺望閣に於て開催される由　宿題「五十」旭映君選「永久」孝三郎君選「續く」夢路君選締切十月十八日着（各五句）▲大名古屋川柳社では樹立記念のため一、川柳作品展覽會（松坂屋）一、川柳寸劇の放送（大名古屋川柳社出演）一、記念川柳大會（會場未定）右は汎太平洋博覽會開期中に催する豫定との事▲川柳地帶發行所（横濱）では川柳地帶後援會員を募集してゐる後援會員には一口二圓毎に小島一谿氏の短册と川柳地帶一ヶ年間の購讀券を進呈の由。希望者は横濱市神奈川區平川町四九同發行所へ▲兵庫附錄の大毎柳壇川柳大會が二十七日神戸協和會館で開催され紋太、水府の兩君が講演された▲後藤蝶五郎君の句集「壺」出版記念の青森縣下川柳大會が十月十一日午後一時より黑石町公會堂に於て開催され三太郎、不滿人の兩君が講演される筈盛會を祈る。▲新倉裕待君の追悼句會が知古川柳會、貿易川柳會、川柳地帶社、みゝずのぐろうぶ、東京柳友會によつて十月三日横濱の隆松館で盛大に開催され、車山、要人、初太郎、すゞか、鬼佛、天那鬼、啞三昧、懷窓、三葉、斗酒、新月、互角、柳葉等の諸君から寄書を頂く▲福岡から刊行されてゐる松囃子では後援會員を募つてゐる。詳細は福岡市下店屋町九川柳拳骨吟社へ▲川柳雜誌社（大阪）では九月二十四日夕べカナメ食堂の階上に於て柳翁忌、懇話會を催した參會者は舊同人ばかりで川柳の旅から歸られた路郎師を圍んだ和やかな會であつた。▲川柳研究社（東京）主催で植木鬼佛君の句集「浮雲」の出版記念句會が九月二十三日赤坂

柳誌要目（九月號）

柳窓漫筆
　　和田天民子（川柳倶樂部）
「同人」初稿
　　大島無冠王（同　人）
「柳多留」序文の研究（五）
　　前田　雀郎（せんりう）
柳樽を型態づける基本的用語の文法的解說（三）
　　木村半文錢（むさしの）
明窓獨語
　　村田周魚（川柳きやり）
川柳萬歲の唱和へ（時評）
　　品川陣居（川柳きやり）
賭博と其取締（古川柳考證）
　　植木鬼佛（川柳きやり）
定家の和歌十躰と日車の傳統美（完結）
　　木村半文錢　川柳ビル）
「川柳江戸砂子」と「柳多留拾遺」の著者（四）
　　櫻井　六葉（梅鉢）

溜池の三會堂で盛大に行はれた

創刊と廢刊

▲川柳北斗(仙臺)濱夢助君を主宰として十月より創刊號を發行さるゝ由、御發展を祈る

▲川柳へちま會と草笛吟社が提携合流の結果「大名古屋川柳社」る樹立し、名古屋川柳會のため貢献される事となり、月刊「波止場」を十一月號より發行の由御發展を祈る▲幾度かその實現を傳へられてゐた柳誌「氷原」(小樽)が古田八白君の手で復活した▲川柳おもひで吟社(東京)では第五卷第九號通卷五十號を以つて廢刊同時に吟社は解散される事となつた

消息

▲川柳雜誌社神戸支部の會が久しぶりで九月六日に開催され明珠、幸捐、華水、吉左右、春秋の諸君等から寄書を頂く

▲田中不倒人君(東京)は京都へ轉勤されたのその送別會が九月六日「京花かもめ」で開かれ、花川洞、雨吉、玉兎郎、雀郎、不倒人、茶六、太郎丸、三太郎、右近、○丸、しげを、盈光の諸君から寄書を頂いた▲冨士野鞍馬君(東京)は臺灣各地の展覽會の揮毫及び十一月に開催される白木屋名士の會への出品を考案中の由▲安川久流美君(川柳人協會名譽會員)は十月から金澤北國夕刊新聞へ入社、專ら軟派記事を擔當される事となつたが柳壇の爲めにも盡力されると▲關本一瓢君(梅鉢編輯長)十月初旬に腸を患はれたが既に快方に向はれた▲擬蜜珠句集が金澤から十二年の新年に發行される由

▲越中今雨君は自選句集を出版される由▲竹田花川洞君(東京)は九月中旬來阪されたが又二十七日から十月二日迄京都へ出向かれる由▲岡田三面子君(川柳人協會名譽會員)は東京帝大奚内科一號室に入院(面會謝絕)思ひがけなくも二十六日付の病床よりのお葉書を頂くそれによれば病勢は日々極めて小量ながら減退、先づこちらのものとの宣言を受けられた由。やゝ愁眉をひらいた一日も早く御快方を祈る▲廡生路郎君は十月中旬梅鉢川柳社(金澤)主催の「まるこし」川柳畫贊展へ揮毫出品された▲みすゞ吟社(長野)では川柳忌に善光寺參詣、祖翁の冥福を祈つた因に左の諸君より寄書を頂く涼風、龍香、衣人、米一期、大雀高、靜豊、米男、柳友、久郎▲昭和川柳社(大阪)では京都府乙訓郡大原野村の回峰寺へ參詣せいさく、破竹、凡三胄馬蟬古、澄風、百雷、坊哉、悠秋、申三、清綠、蒐杵郎、紫朝等の諸君から寄書を頂く▲松山川柳會(松山)では初代川柳忌句會の席上から耕一路、大樓、靈子、泰泉、五健、承春、楪子雨眠、浩笑子、其沙子、雨城、

斷章二つ　松丘　町二(川柳地帶)

未踏境から未踏境へ　鈴木草々子(川柳地帶)

誹風柳樽拾遺輪講　糸岡謙堂外八名(番傘)

川柳の文化指導性　市川番茶子(番傘)

洞察力の躍動　遠水眞珠洞(松囃子)

博多と川柳…附福博に因む川柳…　大島　濤明(松囃子)

生活川柳の檢討　丹羽　紫朝(昭和川柳)

古今川柳評論(九)　堀口　塊人(昭和川柳)

胄明の表現技巧　木村牛文錢(ふあうすと)

定型の起源　鈴木小寒郎(ふあうすと)

ケイ評釋(後編一八)　綿谷摩耶火(ふあうすと)

名所川柳温美半島の卷

大觀等の諸君より寄書を送られた▲みすか川柳社(今治)に於ても伊豫鐵樓上で川柳忌をいとなみ柳石、アアノマロ、心府、笑兒、香方、紫陽、紫期、仙海、一穂、龜水君等から寄書を頂く▲京都川柳社(京都)では左の如く同人の異動があつた。新同人伊藤秋生君退社小森咲星君鹽野芯象君▲本田溪花坊君(川柳人協會名譽會員)は繪筆の旅に東上され、初代川柳忌に田席福田山雨樓君に逢はれた、引續き南伊豆下田、大島等月末まで各所に畫の旅を樂しまれた羨しき限りである▲弘津骨人坊君(朝鮮)は若い熱心な投句家であるが全北金堤あたりは俳句が盛んで川柳への理解がないとのたよりに接したが今に同君の熱と努力で川柳が擡頭して來ることを信じてゐる▲濱田久米雄君(前岬柳吟社幹事)は廣島鐵道局へ榮轉されたがその送別會が九月二十二日和田宮通德行寺に於て午後七時より開催され、出席者三十名記念品の贈呈ありこれに對して久米雄君從來の支援を謝し、消息によれば、年々歳々川柳忌に起きてゐた事なし昨年は「みほの足元にやみ石とならず」など献句してゐる。今年は座つてゐたしと頑張りつゝあるも數日來發作强度。(氣温も朝は十八度に下る)夜中眠らず、又一苦勞書見を樂しみ時に執筆、本日體重を計る十貫、その事誠に御同情に堪えない▲富士野鞍馬君(東京)は川柳忌に墓參された旨松江の旅からおたよりを頂く、見送りの藝妓驛長見ない振。安來節本場できけばちとちがひ▲昭和川柳社(大阪)では左の諸君を新同人として迎へられた。吉田岱石、西島水郎、三好阡々野村坊哉、渡邊巨雷、大西青馬中岡三吉、津田美起也▲永先芳十君(大阪)は九月十三日高知へ歸省、柳人に逢ふて來られた由▲食滿南北君(川柳人協會名譽會員)は九月五日大阪歌舞伎座に於け、澤正追悼講演會で講演

警察官吏唯一の句集

その僞らざる心を聽け
飾らざる姿を見よ!

植木鬼佛著

川上三太郎序、高木角戀坊文

『浮雲』菊半截一三〇餘頁 色彩美術木版畫入

定價四十錢 送料四錢

附錄として菊版五十餘頁の鬼佛等社會裏面研究資料『隱語と用語』贈呈す

發行所 川柳研究社
東京市赤坂區青山南町四ノ二二

發賣所 紫雲亭

川柳雜誌社兵庫支部の將來を、希望して披講に移り和やかに終了したとのこと。▲姪子省二君(川柳人協會名譽會員)よりの御

鈴木 可香(川柳草薙)
川柳考證「江戸時代から昭和の警察」

植木 鬼佛(川柳研究)
活動力の資源—土佐柳界—

筒井 梨生(帆傘)
覺十窟談義

姪子 省二(湯の村)
明日の川柳を語る

川上日車(川柳みすか)
川柳への發展

石崎柳石(川柳みすか)
川柳國名盡(七)

大田 秋水(靜岡川柳)

川柳家戸籍調(續)

(係) 綠雨

(1)姓名、(2)雅號及別號、(3)生年月日、(4)出生地、(5)現住所、(6)職業又は勤務先、(7)好きな句、(8)自信の句、(9)川柳以外の趣味(10)配偶者子供の有無、(11)嫁ひなもの(12)川柳に手を染めた年月

された▲森雞牛子君（川柳人協會名譽會員）は北大阪、柳園、番傘の初代川柳忌で講演をされた由▲御所車川柳社（京都）では左の諸君を新同人とされた長田紫映君（仁川）小杉畔丘君（滋賀）鈴木大砲君（大阪）馬場溟二君（丸亀）林正治君（和歌山）河田恒雄君（大阪）井上英兒呂君（京都）▲橋本緑雨君（大阪）は改築慰勞のため家族連れで九月の寶塚に遊ばれたさうだ▲財敎社の矢野錦浪（谷孫六）君は近來健康を害してゐられたが、この程浦和へ移轉された御全快の一日も早きを祈る▲綿谷摩耶火君（東京）は連歌と俳諧八月號に「點取俳諧」を執筆九月上旬熱海に於て休養されたとの事▲植山九天君（大阪）は大鐵局の多數の人々ならびに本社の路郎、機見女の見送りを受けて十月一日午後五時四十七分下關行急行で廣島鐵道局へ赴任の途につかれた▲月原宵明君（愛媛）は六月頃から健康を害してゐられる由御健勝を祈つてゐる尙原田一風君は大阪へ、平井藤生君は鄕里へ歸省等で聊かセンチになつてゐられるとのこと▲劍花坊追悼會が九月十二日柳樽寺に於て開催されたが、本社東京支社長福田山雨樓君も出席、披講後座談會に移り、山雨樓君の自由律否定論について鶴彬君が質問の矢を放ち、双方の應酬が交され續いて川柳職業化、俳句性と川柳性等の問題に移り論戰は相當にはげしかつたとか▲西田艸樂君（大阪）は九月から引續いて藥石新報の柳壇の選をしてゐられる▲百井利元君（浦和）は今回川柳きやり吟社の同人に推薦された由▲きやり吟社（東京）では支社制を設け北米支社をシヤトル（森田玉兎方）朝鮮支社を太田府（川崎無一佛方）の二ケ所に設置された▲川上三太郎君（東京）は東日柳壇を受持ちその第一回の課題吟「銃獵」は十月九日に締切られた。▲山海關國境吟社の高杉無智庵君は九門口へ榮轉されたとの事▲重田亞童君（機濱）は今回「川柳よこはま」の同人に參加された由▲岸本水府君（川柳人協會名譽會員）は九月下旬大阪商科大學主催の廣告講演會に「新聞廣告」の題下に講演された

慶弔

▲森東魚君（川柳人協會名譽會員）のお宅では女兒御安產の由お喜び申上げる。▲三原狂路君（山口）のお宅では九月十五日女子を儲られたとの事御祝ひ申上げる。▲知古川柳會（横濱）の新倉裕恃君は九月十七日朝七時五分突如腦溢血で逝去さる。折から東上中の麻生路郎君（川柳人協會理事長）は十九日夜故人の宅を訪ひ、哀悼の意を表された知古川柳會の損失を思ひ御同情に堪えない。▲むさしの川柳會

（489）　田中すゞか

（1）田中兼吉　（2）すゞか（3）明治二十三年十月廿五日　（4）東京芝區濱松町三丁目三番地六（5）東京芝區濱松町三丁目三番地六　（6）鮨　（7）本當の川柳（8）下番は世帶崩しの姿なり竹馬の話に猪口のはかどらず（9）植木、鳥　（10）有　（11）今の川柳と云ふ句　（12）明治三十五六年頃

（490）　伊藤　瑤天

（1）伊藤幸一　（2）瑤天、紅茶碗、雪繪　（3）明治三三年八月五日　（4）芝で生れて芝で育つ（5）東京芝新橋六丁目三六に居住　（6）染色工業　（7）要するに大どんぐりに小どんぐり（劍花坊）子へ別に書くカナだより手間がとれ（啞三昧）（8）子をみんな寢かせて二つうどんかけ見え透いた此處でも師走の虛を聽き　（9）（漫畫と漫文）（10）初婚のまゝの妻二男一女　（11）

（東京）の同人大年木通君は八月廿日胃潰瘍にて永眠された謹んで哀悼の意を表する▲青森川柳社の田澤有石君の父君が御逝去された母堂を失はれてより七十三日目に又してもこの御不幸同君の胸中を察してはお慰めの言葉さへ見出せぬはるかに君の自愛を祈る▲堀口塊人君の御子息が九月七日逝去された謹んでお悔み申上げる。▲小西文柳君（東京）元天馬吟社同人は九月十五日三十二歳を以つて他界された。哀悼。

改號

▲天谷三國君は壽號糸人（東京）▲清水一福君は一寸平（東京）▲有賀七五三君は竹葉（大阪）▲桂浩詩君はひろし（京都）▲伊藤三郎君は天心（長野）▲近藤抱日君は虹兒（東京）▲門田九紫君は雨城▲酒井一茶君は壹茶（愛媛）▲玉川玉坊君は靜（東京）▲中島歌丸君は更衣（東京）

改姓

▲河村一潮君は關本（神戸）

轉居

▲河柳雨吉君（東京市本所區吾妻橋二ノ三三隅田ハウス〈〉▲正岡容君（東京市江戸川區小岩三ノ一六一七〈〉▲野本昭四君（東京深川區千田町一二一〈〉▲伊藤三朗君（長野縣上伊那郡長藤村三四五六〈〉▲平澤洪水君（東京市向島區隅田町三ノ五三五山藤方〈〉▲柳田奈緒美君（横濱市神奈川區鳥越町四三〈〉▲河合恒かず君（石川縣江沼郡篠原村字笹原西野方〈〉▲大曾根龍鳳君（名古屋市中區則武町西廻三八八四〈〉▲舘山三男君（ハルピン市馬家溝永和街二七號ノ四〈〉▲井口呑湖君は（滿洲國安奉線蘇家屯高町九六號ノ三大家方四〈〉▲中島歌丸君は（東京市本所區須崎町二三二四〈▲春岡洋士君は（大阪市西成區橋三ノ五〈〉▲荒井英賀夫君は（今治市西條町驛前本通〈〉▲淺村紅の花君は（金澤市長町四番丁四九〈〉▲草薙眞一君は（東京市神田區小川町二ノ六伊藤金次郎方〈〉▲川柳風呂社は（松江市和多見町七三吾郷夢迷方〈〉▲柳大門君は（大阪市東淀川區十三東ノ町四ノ二七〈〉▲西村有示君は（大阪府中河内郡布施町字森河内六四四〈〉▲關本一潮君（神戸市兵庫區須佐野通二丁目七ノ一三〈〉▲佐藤洋々君（大阪市天王寺區上汐町一ノ一六〈〉▲石川邦花君（大阪市東淀川區國次町一ノ九好營寮馬淵内〈〉▲田中水哉君（大阪市西成區有樂町一〇〈〉▲重松泊灯君（吳市中通一丁目一五ノ三〈〉▲矢野錦浪君（浦和市仲ノ原三七一二ノ一〈〉▲柑元紋太君）神戸市神戸區再度筋七〇〈〉▲中村鐵兜君（番地改正の結果東京市淺草區菊屋橋二丁目六ノ三〈〉▲森淞鳳君（名古屋市

蛇、宗教家、虚（12）大正十年頃

（491）　山路星文洞

（1）山路重文（2）星文洞、二〇坊（3）明治二十八年七月廿八日（4）東京市淺草區（5）東京下谷區豊住町十一（6）皮革製袋物製造（7）朝がへりだん〳〵家が近くなり　といふ樣な古句（8）文錢の指輪がうい母の指（9）千社札、マッチペーパー蒐集（10）妻有男の子二人（11）薄情な奴、魚肉、酒（12）明治四十五年五月

前號正誤

會社から見ればスターも一女工（九頁）

慾を消してハラ〳〵と頁を繰りぬ（同）

戀人は寢た時間まで書いて來る（二十一頁）

增位汀柳（四十三頁）

中區南門町六九(〇)▲岡光一君大阪市南區鰻町三ノ三六今下方(〇)▲大阪正一君(大阪府泉北郡高石町南一〇九七)南海沿線「高師ノ濱」驛前(〇)

其他

▲春から休刊してゐた「〇丸帳」の九、一〇、一一、一二が矢繼早に發行された、同君の母堂逝去のための延刊と知つては同情に堪えない。一層の自愛と奮鬪を祈る▲麻生路郎君(川柳人協會理事長)は「上方」九月號に上方風俗「じんべ」の執筆を明るい家庭に「ビルの机で」を藥店講座に「街のスナップ」を連載された。▲平井青踏君(大阪)は新興俳句雜誌「旗艦」九月號誌上に「先導するもの」と題して川柳家より痛快な一矢を放たれた▲「水の趣味」九月號に秋野舗道君は「川柳ヴァラエテ」を執筆▲大村新蟬君は「反響」九月號に柳文「指環」を執筆▲川上日車君は「太湖」九月號に「宗教と俳句の藝術性」を執筆▲宮尾しげを書伯の筆になる川柳百人一句の第二篇が近日出版される事になつた。豫約を募集してゐる、尙保存版(三度刷和綴)の初篇二篇を入れる帙を作つてゐるのでこれ又御用命を乞ふ。詳細は東京市豐島區巢鴨六ノ一二九〇へ問合せられたし▲「力の日本」九月號に川上三太郎君は「處世川柳を味ふ」を執筆された

路郎先生座談會

九月廿一日夜・於松本市翁堂三階

前列向つて右より
阪田風谷、征矢兵馬、住山久二、石曾根民郎、麻生路郎師、赤木寄峰、小山松南。田内創道
中列右より
豊島專人、神谷正司、田中吐句堂、中澤多華思
後列右より
名越信吉、中村靜風、岩井汗青、青木月明、倉田呼雲、莊篁田林鐘
(撮影者の失敗で赤穗年秀君一人カメラに入つてゐません—民郎)

(一二頁より續く)

足萎へに重き布團や春寒し
足萎へに梅の便りぞ哀れなる

「どちらが宜しきや」と書添へてある。啄木には

〇運命の來て乘れるかとうたがひぬ蒲團の重き夜半の寢覺めに

の一首がある。

〇醫者の顏色をぢつと見し外に何も見ざりき胸の痛み募る日

かう詠んだ。啄木の心には、ひし〳〵と迫り來る死の手を感じてゐたであらう。夜叉郎は死の數日前の日記に

病人の見て置く醫者の鼻の穴

と詠じてゐた。さうして、明かに死の迫れる事を令妹から宣告された後は、ピツタリ苦痛を訴へるのを止めたさうである。かくて夜叉郎は靜かに永久の眠りに陷つて行つたのだ。敢て之を私は川柳往生と云はふ。啄木に投げた彼の言葉を味はひつゝ私の追憶は盡きる所を知らない。(廿日夜)

編輯縱横

▼秋十月の夜。灰皿にパットの吹殼が堆くなつてゐる。マッチの摺りさしがジグザクに横はつてゐる。編輯をいそぐ私たちに秋はひし〳〵と迫まる。

▼本號は十二三日頃に出したいと思つてゐたが、私の旅行がたつて本號も發行日ぎり〳〵にしか出ないことになつた。

▼川・雜の仕事もさて專門にかつて見ると、なか〳〵忙しいが川・雜にかまけてしまはないで、微力の及ぶ限りは川・協のために働くつもりだ。それで川・雜の九月號の發送が濟むとすぐその日の夜行で東上した。

▼そして東京・横濱・松本の柳友たちと川・協を語つた。これからの私は寸閑をぬすんでは活動を續けるつもりだ。

▼何れにしても川・協のやうな仕事はさう易々と完成すべきものではない。私はリレートの一役を買つて出た位に考えてゐるのだ。後走する人が少しでも樂なやうに足がためをして置けばそれで本望である。

▼本號へは「川・協と其の事業」を發表することにした。ボチ〳〵讀んでいただきたい。碌に讀みもせずに尻馬に乘つて物を書くやうな人間は今の柳界に不必要である。

▼私の「川柳職業人宣言」に對しても「川柳人協會」の仕事に對しても明確な理解と深甚な同情で激勵の辭を惜しまれなかつた方もあるが、中には川柳職業人や川柳人協會といふ文字から常識的な筆を執つてゐるに過ぎない人もあつた。さうした人達にはもう少し省察と批判が必要であると思つた。甚しいのになると「てんで私の書いたものを讀まずに見當外づれのデマを飛ばしてゐるのもあつた。

突込んで來る氣なら、せめて村正の切れ味を見せて欲しい。銀紙のめくれた竹光では切つたつもりでも赤い血が出ませんぞと云つてやりたい。呵々。

▼十月五日に本誌の掲載事項の種類が變更されたので本號から再び無保證新聞紙法に據る刊行に戻つた。しかしそれがために現在の經營には何等の支障もない。ただ將來を考えて有保證誌にしたのであつたが、まだ其の機が充分熟さなかつたものと見る外はない。尤もいよ〳〵必要に迫れば明日にでも再び有保證にするかも知れない。

▼前號で「柳誌要目」の欄を新設したところが非常に好評だつた。創設甲斐があつたので編輯子もよろこんでゐる。

▼九月二十四日の夜、内輪ばかりで柳翁忌懇話會を開いた。私が東京で泊まつた「ホテル」の珍談を語つたので次いで艸樂君が京都で泊つた旅人宿の話が出てみんな大よろこび、その内容は一寸こゝでは洩らせない。何れ艸樂君も私も名筆の力でお目にかける機會があらうからそれまであづかつておく。

▼目を病んで長い間筆の執れなかつた福田山雨樓君が久しぶり

川・柳・横・町

郵税値上げの號外に蒼なくつた柳誌ありや曰くなし。又曰く。こたえるほどの發行部數ありや。曰くなし。あゝ朗か。

☆

ラヂオで颱風襲來の豫報頻々。ソレッとばかりに店を飛び出した須崎豆秋君紀の國屋文左衛門が木曾へ走つたやうに京都から神戸のお得意先を颱風見舞の早手廻し。ところが途中でカラリと晴れて、颱風の夕の字も吹きさうにない。えゝ聞えませぬおてんとさまと大阪さして舞ひ戻つて「この調子では儲からぬ」

☆

花菱と三太郎と路郎と三人が三人とも香具師が好き。淺草觀音堂の境内でトウ〳〵赤鉛筆三本を十錢也で買はされた。横に

にホントに久し振りに「保土ケ谷より」を寄せてくれた。長野縣の川柳村の項を讀むと同君がいかに川柳を熱愛してゐるかが判つて目がしらがあつくなるではないか。

▼「川柳詩」の同人で大正十五年の九月九日に亡くなつた伊東夜叉郎のことが時々私のあたまをかすめてゆく。逃がした魚は大きいといふ理由でなしに、ホントにすぐれた柳人だつたので生前親交の深かつた川村花菱、森東魚の兩兄を煩はしてその思ひ出を綴せることにした。切に御愛讀が願ひたい。

▼銚子一本でノツ〳〵する西田艸樂君が「秋と酒と杉」を書いてくれた。艸樂君一流のものである。私が曾て大阪毎日に「秋と酒」を書いたのが面白かつたのでフト書く氣になつたのださうだ。

▼鏃川支部の十周年記念川柳大會が十月十七日に出雲今市で開催されるので私は本號の發送が濟むとすぐ十六日の夜行で山陰の旅に出ることになつてゐる。十年と一ト口に云つてしまへばそれまでであるが、その間支部幹事尼綠之助君の努力は容易ではなかつた。君の十年の勞に酬ゆるためにも盛んな拍手を送つていただきたい。

▼一年は長いやうで短かい。又目の前に忘年句會が迫つて來た川・雜の京阪神各支部聯合主催の忘年川柳大會がいつの間にか年中行事の一つになつてしまつた。この中で僕の氣持を一等暗くさせたのは明大へ岡田三面子博士を訪れた時、帝大の吳內科へ入院されて面會謝絶だといふ事を給仕から聞かされた時であつた。

▼次いで主婦の友の八代登氏を訪れたら病氣、鬱松堂へ品川陣居氏を訪れたらこれ又病氣、財敎社へ谷孫六氏を訪れたら出社はされてゐたが私を案じさせる程度の健康狀態だつた。

▼これに反して一等愉快だつたのは上十條の蒼々亭で一泊して翌十八日の晝過ぎに、三太郎、山雨樓の兩君と車を飛ばして幡ケ谷の旗洗莊の川村花菱兄を訪れ主客四人が膝を交じへての歡談であつた。忙しい用件を忘れた譯ではなかつたが、日沒近くまで盃を手にしてゐた。その日同席した新派の柳氏のライカにおさまつたのが、別揭の寫眞である。(東京雜記の上部參照)

▼發送を手傳つてゐた岡林君もヴァイオリンを抱えて、岡山へ行つてしまつた。葭乃がポツ〳〵動きはじめた。機見女と私は夏以來の苦鬪を續けてゐる。一層の御支援をお願ひする(路)

川柳指導講座

講師　塚越　正光氏

課題「重れ着」一人一句

締切　十一月五日

投句　本社宛「川柳指導講座句稿」と明記する事

立つて見てゐる連中「アレは屹度サクラだ」と思つたに違ひない。誰一人買はなかつた。

☆

本年は女房役句集の刊行が大流行。路郎の綠雨、不浪人の蝶五郎、三太郎の鬼佛、何れも菊半截。亭主は序文やら校正やらで大騷ぎ。

☆

社の編輯室を訪れた綠雨君へ機見女が早速呼びかけた。「實塚へ行かれたさうですネ。何組でした?」「サア、何組や知らんで……僕はお伴で、會計をしに行つたのや」この返事には流石に機見女も「まア」と云つたきり、二の𠮟がつげない。私は「二柳子(綠雨君の舊號)が立つと會計かと思ひ」といふ樂屋落の句を思ひ浮べて「ナルホドなア」

(不死鳥)

川柳雜誌社　關係の人々（いろは順）

賛助員

池澤樂居　赤井清司
長谷川一徹　淺田一
大道弘雄　末弘嚴太郎
岡本一平
片岡直方
笠原路生
嘉納純
田中辰二
長崎柳秀
長岡半太郎
長野晴濱
國枝史郎
藤村作
藤本卯之助
頴原退藏

客員

伊藤彦造
鳥山一歩
沖野岩三郎
大島濤明
大谷五花村
大西長三郎
岡田三面子
小川武
亀井晟修
川上三太郎
川村花菱
森東魚

米村あん馬
田村孝之介
谷脇素文
生方敏郎
高尾亮雄
窪田銀波樓
安川久流美
前田雀郎
前田五磋
食滿南北
柴谷宰二郎
篠原春雨
蛭子省二
藤里好古
小林不涙人

川柳雜誌社
社主　麻生路郎

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）幹事　庄萬よし
九三會支部（大阪市）幹事　北山悟郎
神戸支部（神戸市）幹事　喜多春秋
國館支部（國館市）幹事　亀井晟修
高知支部（高知市）幹事　國澤春水
梅田支部（大阪市）幹事　谷鮎美
螢ヶ池支部（大阪府）幹事　谷流之介
田邊支部（和歌山）幹事　辻左馬
簸川支部（島根縣）幹事　尼緣之助
京都支部（京都市）幹事　明石柳次
鳥取支部（鳥取市）幹事　中島鐵州
松山支部（松山市）幹事　酒井大樓
御旅支部（大阪市）幹事　江戸みつる
天王寺支部（大阪市）幹事　須崎豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事　宮岡白峰
宮崎支部（大阪市）幹事　西いわを
御池橋支部（大阪市）幹事　勝谷山兒
松江支部（松江市）幹事　山本喜山
大鐵局支部（大阪市）幹事　荒井英賀夫
西條支部（愛媛縣）幹事　竹内機見女
光耀會（大阪市）幹事　市塚沒食子
今里支部（大阪市）幹事　上町支部（大阪市）幹事　廣原都會人
伯耆支部（鳥取縣）幹事　三鴨美笑
竹原支部（廣島縣）幹事　松井可笑
十三支部（大阪市）幹事　淺野牧人
臺中支部（臺灣）幹事　宮内耕朗
兵庫支部（神戸市）幹事　三崎陽幸
光笑會（大阪市）幹事　永田里十九
今治支部（今治市）幹事　月原宵明

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募集

第十四卷 第一號懸賞課題

十一月五日締切

（十句以內）

十八九　前田五健　選

第十四卷第二號懸賞課題

十二月五日締切

（十句以內）

腕力　西村明珠　選

毎號募集

近作柳樽（雜吟十句）麻生路郎選

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

懸賞句規定

▼天地人三位に薄謝を呈す

▼一般應募歡迎

定價

一部　金三十錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座穴阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます。但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十一年十月十日印刷
昭和十一年十月十五日發行

第十三卷第十號
（毎月一回十五日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社　電話天下茶屋二五七九番　振替穴阪七五〇五〇番

支社　東京市芝區南佐久間町一丁目五二番地　川柳雜誌社東京支社

禁無斷轉載

賣捌書店

（大阪）大賣捌大賣書店　參文社　明文堂　其他　市內各書店

（東京）東京堂（かんだ）　巖松堂（かんだ）　玉森堂（あさくさ）　紀伊國屋（ざん）　三味堂（神月）　米田、寶文館（函館）　石塚（京都）

三宅（名古屋）靜觀堂

川・雑・案・内

大型活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し前金切手共用可）改訂、移轉、句會案内、廣告、その他

路郎先生染筆

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短冊を川柳家に限り左の通りで頒布致します

軸箱入　貳拾圓・額　貳拾圓
小物　五圓・短冊　參圓

御申込は前金で發行所へ

投句用箋

川柳雑誌投句用箋の昭和十一年度新製が出來ました。投句には本社正規の此用箋を御使用下さい。

五十枚綴　二冊　金十二錢（送料共）

御申込は川柳雑誌社へ
＝切手代用も可＝

御禮

この度の御地訪問に際し種々御配慮を忝ういたしました事を深謝いたします。歸阪後も日夜、「川柳人協會」のため東奔西走を續けて居ります。今後は只管諸兄の御指導と御鞭撻を力草として邁進いたしたいと存じます。一層の御聲援を祈り上げます。先は御禮まで

敬具

川柳人協會理事長　麻生路郎

東京・横濱・松本川柳家各位

合本特賣

川柳雑誌の合本第二卷より第十卷まで
各一卷　金壹圓五十錢
第十一卷及十二卷　金參圓
送料大阪市内　一冊六錢
市外　一冊廿四錢

御申込は前金で川柳雑誌社へ

後の葉柳を頒つ

大正八年に出してゐた「後の葉柳」の殘本が僅かばかし出て來たのでお頒ちします。日車、半文錢、路郎の三氏の句しか載ってゐない桝形四頁もの全三部で十錢、二錢切五枚お送り下さってもよろし。

川柳雑誌社宛

綠雨居偶會

十月二十二日(木)　夜
兼題「雲」三句
路郎先生選
吹築後の久しぶりの偶會ですどうぞお越し下さい

住吉區平野西之町八三
橋本綠雨

懸賞川柳

課題「贈物（おくりもの）」十月十日
用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）選者麻生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先　大阪市西成區玉出本通三ノ三六　麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

川柳を作る人、愛好する人の必讀誌

川柳倶樂部

毎月一日發行
一部廿錢・送料一錢

東京市牛込區拂方町一四
川柳倶樂部社

川上三太郎主宰
（毎月一回發行）

川柳研究

一冊　金廿錢
半年　金一圓
一年　金二圓

異色ある本誌の創作欄と初心者への入門欄をアナタは絶對に見逃してはいけません
見本希望者は二錢切手十枚同封左記へ

東京市王子區上十條町八五〇
發行所　川柳研究社

川柳きやり

菊判毎號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢

東京豊島區高田本町二ノ一四六八

川柳きやり吟社

あなたの健康のために
あなたの藝術心を
滿足せしめんために
そして
可愛いお子さんたちのために

石井漠舞踊研究所

大阪堂ビル二階　事務室二階二〇一
（電話　北五八九〇番）
理事　高尾亮雄

清酒
白鶴
ハクツル
發賣元
嘉納合名會社
大阪・東京・神戸・京城・仁川・大連・奉天

推奨　楠林醫學博士
監査　瀬片醫學博士

ワダカルシユーム錠

安産のために

母性愛の達成へ

母性愛の發露たる姙娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシユームの使命であります。即ち母体と胎兒の保護榮養に任じ、悪阻期を安全に經過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめますからお産の守護神として御信任を頂いてゐます。更に授乳期には、母乳を豐富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髪、齒牙の悪化を防止し、乳兒も隨つて健やかに育成されますから、凡ゆる女性を朗かな圓滿な家庭の人とします。

片瀬醫學博士述「安産のために」進呈

代時ムーユシルカ
てし設建を

茲に二十年、幾十萬の姙産婦諸姉が、「ワダカル」の偉力を禮讃せられつゝある事實と、我國カルシユーム學界の泰斗、大阪醫大教授片瀬博士の、二十年一日の如き熱意と努力により、不滅の城域を築き得ました事は敝店最大の誇とする處であります。

安産！安産！安産のために
「ワダカルシユーム錠」

大阪道修町　和田卯助商店

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日）
川柳雑誌（第一五三號）
定價金參拾錢 送料壹錢

にきびとり美顔水

▲ニキビ吹出物に第一等の良藥！

ニキビ吹出物にこれ程よく効く藥はないといはれ、種々な藥や方法で失望された方でもこの藥の効能には滿足されます。

▲美容藥として

この藥は美容藥としても非常に優れた効果があり男子方にも婦人方にも廣く賞用せられてゐます。